

こうどの
神殿遺跡 B・C 地区

みなみ ひら
南平第3遺跡

みなみ ひら
南平第4遺跡

なか の はら
中ノ原遺跡

国道218号高千穂バイパス建設関係発掘調査報告書(2)

1999

宮崎県埋蔵文化財センター

こうどの
神殿遺跡 B・C 地区

みなみ ひら
南平第3遺跡

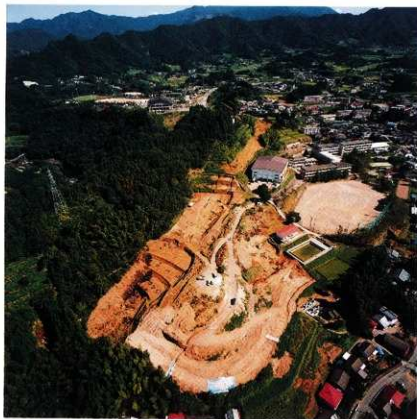
みなみ ひら
南平第4遺跡

なか の たら
中ノ原遺跡

国道218号高千穂バイパス建設関係発掘調査報告書(2)

1999

宮崎県埋蔵文化財センター



神殿遺跡A、B地区
航空写真（南から）



神殿遺跡 B地区
竪穴式住居(SA1)
左：完掘状況
（南から）
左下：東部遺物、焼土
検出状況
（南西から）
右下：土層断面の状況
（北東から）
〈第10図 断面B-B'〉





神殿遺跡C地区
遠景



南平第3遺跡
住居跡検出状況

序

日頃より本県の埋蔵文化財の保護・活用につきましては、ご協力をいただき感謝申し上げます。

この報告書は、宮崎県教育委員会が建設省延岡工事事務所の委託を受けて、平成6年から平成8年にかけて、国道218号線高千穂バイパス建設予定地内に確認された遺跡の発掘調査記録であります。

中ノ原遺跡では陥し穴状遺構が発見され、南平第4遺跡では縄文時代早期の遺物が見つかりました。特に、神殿遺跡や南平第3遺跡で検出された弥生時代後期から古墳時代の住居址群は、当時の人々の集落の立地や生活の様子を考える上で貴重な資料であり、出土遺物では瀬戸内や畿内地方の影響を受けた土器が出土するなど、肥後あるいは豊後地方だけでなく遠く離れた地域からの文化の流入も読み取ることができます。

最後となりましたが、発掘調査に際し、建設省および地元の方々をはじめ発掘調査から整理・報告まで多くの皆様のご理解とご協力を得ました。ここに感謝の意を表すとともに、本書が文化財理解の契機となり、広く活用されることを願っております。

平成11年3月

宮崎県埋蔵文化財センター

所長 田 中 守

例 言

1. 本書は、国道218号高千穂バイパス建設に伴い、建設省延岡工事事務所の委託を受けて県教育委員会が実施した4遺跡の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査の期間および調査体制は第1章のとおりである。
3. 本書使用の遺構実測図は、岩永哲夫、米久田真二、戸高真知子、松林豊樹、谷口武範、飯田博之、日高広人が作成した。
4. 本書使用の遺物実測図は、戸高、松林、谷口のほか整理作業員の協力を得た。
5. 本書使用の写真は、米久田、戸高、松林、谷口が撮影した。
6. 本書使用の図面の製図は、戸高、松林、谷口のほか整理作業員の協力を得た。
7. 本書の執筆は、米久田、戸高、松林、谷口が分担してあたり、文責は目次に明記した。
8. 土層および土器の色調については「新版標準土色帖」による。
9. 本書使用の方位は磁北である。
10. 本書では、遺構に次の略号を使用している。
 竪穴住居跡・・・SA 土坑・・・SC 不明遺構・・・SZ
11. 本書の編集・構成は谷口が担当した。
12. 本書収録の出土遺物および調査の記録類は、宮崎県埋蔵文化財センターで一括収蔵・保管し、公開していく。

本文目次

第Ⅰ章 序 説	1
1 調査にいたる経緯	1
2 調査の経過と調査の組織	1
第Ⅱ章 遺跡の位置と環境	6
1 遺跡の位置と周辺の地形	6
2 遺跡の立地と歴史的環境	6
第Ⅲ章 神殿遺跡B・C地区の調査	9
1 神殿遺跡B地区の調査	9
1) 遺跡の立地	9
2) 調査の概要	12
3) 縄文時代の遺物	15
4) 弥生～古墳時代の遺構と遺物	15
5) 歴史時代の遺構と遺物	20
6) 時期不明の遺構と遺物	27
7) まとめ	30
2 神殿遺跡C地区の調査	45
1) 遺跡の立地と調査の概要	45
2) 調査の経過	45
3) 遺跡の層序	48
4) 遺構と遺物	48
5) まとめ	63
第Ⅳ章 南平第3遺跡の調査	79
1) 遺跡の立地	79
2) 調査の概要	79
3) 層 序	81
4) 縄文時代の遺構と遺物	82
5) 弥生時代の遺構と遺物	91
6) その他の遺構と遺物	141
7) まとめ	143
別篇 自然科学分析調査報告書	173
Ⅰ 土器内埋土の植物珪酸体分析	173
Ⅱ 放射性炭素年代測定結果	180
Ⅲ 南平第3遺跡出土の赤色顔料について	182
第Ⅴ章 南平第4遺跡の調査	185
1) 遺跡の環境と調査の概要	185
2) 遺跡の層序	185
3) 遺 物	185
4) まとめ	189
第Ⅵ章 中ノ原遺跡の調査	195
1) 遺跡の立地と環境	195
2) 調査の経過	195
3) 遺跡の層序	195
4) 遺構と遺物	198
5) 宮崎県、中ノ原遺跡の自然科学分析	211
中ノ原遺跡の土層とテフラ	211
中ノ原遺跡出土炭化材の樹種同定	214
中ノ原遺跡の植物珪酸体分析	221
6) まとめ	221
報告書抄録	232

挿 図 目 次

第I章 序 説	
第1図 遺跡位置図	5
第II章 遺跡の位置と環境	
第1図 遺跡位置図	7
第III章 神殿遺跡B・C地区の調査	
1 B地区の調査	
第1図 神殿遺跡調査対象区域および調査区位置図 (1/5000)	9
第2図 神殿遺跡調査区周辺地形図 (1/1250)	10
第3図 神殿遺跡A・B地区 (I区) 遺構分布図 (1/300)	11
第4図 神殿遺跡B地区トレンチT2土層断面実測図 (1/40)	12
第5図 神殿遺跡B地区出土縄文時代の土器 (1)	16
第6図 神殿遺跡B地区出土縄文時代の土器 (2)	17
第7図 神殿遺跡B地区出土縄文時代の土器 (3)	18
第8図 神殿遺跡B地区出土縄文時代の土器 (4)	19
第9図 神殿遺跡B地区SA1および周辺の土層断面実測図 (1/50)	22
第10図 神殿遺跡B地区SA1実測図および土層断面実測図 (1/50)	23~24
第11図 神殿遺跡B地区出土弥生~古墳時代および時期不明の遺物実測図	25
第12図 神殿遺跡B地区土坑SC1~5実測図 (1/40)	26
第13図 神殿遺跡B地区出土古墳時代~古代の土器 (1/4)	28
第14図 神殿遺跡B地区出土遺物	29
第15図 神殿遺跡A地区出土遺物 (参考資料)	32
2 C地区の調査	
第1図 神殿遺跡C地区土層断面図	46
第2図 神殿遺跡C地区遺構分布図	47
第3図 神殿遺跡C地区SA1遺構実測図	49~50
第4図 神殿遺跡C地区SA2遺構実測図	52
第5図 出土土器実測図 (1)	53
第6図 神殿遺跡C地区SA3遺構実測図	54
第7図 出土土器実測図 (2)	55
第8図 神殿遺跡C地区SC1遺構実測図及び出土土器実測図	56
第9図 出土土器実測図 (3)	59
第10図 出土石器実測図 (1)	60
第11図 出土石器実測図 (2)	61
第12図 出土石器実測図 (3)	62
第IV章 南平第3遺跡の調査	
第1図 遺跡位置図および遺構分布図	80
第2図 土層図	81
第3図 柱穴状遺構および出土遺物実測図	83
第4図 縄文土器実測図 (1)	85
第5図 縄文土器実測図 (2)	86
第6図 石器実測図 (1)	89
第7図 石器実測図 (2)	90
第8図 1号住および出土遺物実測図	92
第9図 2号住および出土遺物実測図	93
第10図 3・5号住居実測図	94
第11図 3・5号住居出土遺物実測図	95
第12図 4号住居および出土遺物実測図	96
第13図 6号住居および出土遺物実測図	98
第14図 7号住居実測図	99

第15図	7号住居出土遺物実測図(1)	100
第16図	7号住居出土遺物実測図(2)	101
第17図	8号住居および出土遺物実測図	102
第18図	9号住居および出土遺物実測図	103
第19図	10号住居実測図	104
第20図	10号住居出土遺物実測図	105
第21図	11号住居実測図	106
第22図	11号住居出土遺物実測図	107
第23図	12号住居および出土遺物実測図	108
第24図	13号住居および出土遺物実測図	109
第25図	14号住居および出土遺物実測図	110
第26図	15号住居および出土遺物実測図	111
第27図	16号住居および出土遺物実測図	112
第28図	17号住居実測図	114
第29図	17号住居出土遺物実測図	115
第30図	18号住居実測図	116
第31図	18号住居出土遺物実測図(1)	117
第32図	18号住居出土遺物実測図(2)	118
第33図	19号住居実測図	119
第34図	20号住居実測図	120
第35図	19・21号住居出土遺物実測図	122
第36図	21号住居実測図	123
第37図	22号住居実測図	124
第38図	23号住居および21号住居出土遺物実測図	126
第39図	22・23号住居出土遺物実測図	127
第40図	24号住居および出土遺物実測図	128
第41図	25・26号住居実測図	129
第42図	25号住居出土遺物実測図	130
第43図	遺構外出土遺物実測図(1)	132
第44図	遺構外出土遺物実測図(2)	133
第45図	1・2号土坑実測図	141
第46図	須恵器・陶磁器・土錐実測図	142
第V章 南平第4遺跡の調査		
第1図	南平第4遺跡位置図	186
第2図	南平第4遺跡位置図	187
第3図	南平第4遺跡A地区土層断面図	187
第4図	出土土器実測図	188
第5図	出土土器実測図	188
第VI章 中ノ原遺跡の調査		
第1図	中ノ原遺跡位置図	196
第2図	中ノ原遺跡調査区	197
第3図	中ノ原遺跡基本土層柱状図及び土層断面図	197
第4図	中ノ原遺跡遺構分布図	200
第5図	SC1遺構分布図	202
第6図	SC2遺構分布図	203
第7図	SC3遺構分布図	204
第8図	SC4・5遺構実測図	205
第9図	出土土器実測図(1)	207
第10図	出土土器実測図(2)	208
第11図	出土土器実測図(1)	209
第12図	出土土器実測図(2)	210

表 目 次

第Ⅱ章 神殿遺跡B・C地区の調査

1 B地区の調査

第1表 神殿遺跡I区 検出遺構・遺物	13
第2～6表 神殿遺跡B地区出土土器観察表(1)～(6)	33～36

2 C地区の調査

第1～2表 神殿遺跡C地区出土土器観察表	65～66
第3表 神殿遺跡C地区縄文土器観察表	66
第4表 神殿遺跡C地区石器計測表	67

第Ⅳ章 南平第3遺跡の調査

第1表 南平第3遺跡出土土器観察表	87
第2表 石器観察表	89
第3～8表 南平第3遺跡出土土器観察表(1)～(6)	134～139
第9表 石器観察表	140
第10表 住居址一覧表	148

第Ⅵ章 南平第4遺跡の調査

第1表 南平第4遺跡出土土器観察表	190
第2表 南平第4遺跡出土土器観察表	190

第Ⅶ章 中ノ原遺跡遺跡の調査

第1～2表 中ノ原遺跡出土土器観察表(1)～(2)	223～224
第3表 中ノ原遺跡出土石器計測表	225

口絵カラー1	神殿遺跡A・B地区航空写真 神殿遺跡B地区竪穴住居跡(SA1)完掘状況 遺物出土状況 土層断面
口絵カラー2	神殿遺跡C地区航空写真 南平第3遺跡住居跡検出状況

第I章 序 説

1 調査にいたる経緯

一般国道218号は、延岡市を起点とし、高千穂町を経て熊本市にいたる宮崎県北部と熊本を結ぶ主要幹線として利用されているが、建設省九州地方建設局延岡工事事務所によって高千穂町内の交通渋滞の緩和と県北交通網整備の一環として、一般国道218号高千穂バイパス、延長約4.7kmが計画された。

県文化課では、予定路線内の分布調査および試掘調査を実施し、5～6箇所の変跡および変跡推定地を確認した。建設省との協議の結果、高千穂大橋西側から高千穂町武道館までを1期工事として竣工することとなり、昭和63年～平成2年の間に宮の前第2変跡、吾平原第2変跡、城ノ平変跡の3変跡が調査され、平成5年に調査報告書が刊行された。

今回は2期工事として、高千穂高校東側から終点押方地区までの約5kmの工事が計画された。県文化課では工事計画に伴い、平成5年度から確認掘調査を実施しながら建設省と繰り返し協議を行い、平成6年度に神殿変跡B地区、中ノ原変跡を、平成7年度に南平第3変跡、平成8年度に南平第4変跡、神殿変跡C地区の4変跡5箇所の発掘調査を実施した。また、調査終了後、平成9年度は遺物整理、平成10年度に遺物整理および報告書作成を行うことになった。

2 調査の経過と調査組織

平成6年度の調査

工事の計画にあわせ、起点側の神殿変跡B地区と、終点側の中ノ原変跡の2変跡の調査を行った。

高千穂高校西側バイパス工事は、隣接して施工される高千穂高校第2グラウンド造成工事の廃土を盛土に利用して行われるが、高千穂高校第2グラウンド造成区域内においても変跡が確認されており、経費・期間等の節減の理由から、神殿変跡A・B地区の調査を同時に実施した。

また、神殿変跡調査中、平成6年9月10日に現地説明会も開催し、約50人の見学者が訪れた。

神殿変跡B地区

所在地 西臼杵郡高千穂町大字三田井

調査期間 平成6年5月23日～平成6年9月16日

調査面積 3,000㎡

中ノ原変跡

所在地 西臼杵郡高千穂町大字押方

調査期間 平成6年9月27日～平成7年2月17日

調査面積 2,300㎡

調査主体 宮崎県教育委員会

教育長 田原直廣

教育次長 中田 忠

八木 洋

調査総括	文化課長	江崎富治
	課長補佐	田中雅文
	庶務係長	高山恵元
事務担当	庶務係主査	宮越 尊
	主任主事	横山幸子
調査担当	主幹兼埋蔵文化財	
	第1係長	岩永哲夫
	主 査	谷口武範（調整および調査担当）
	主任主事	戸高真知子（調査担当）
	調査員	米久田真二（調査担当）

平成7年度の調査

平成6年10月の確認調査によって、多くの縄文後期～晩期の土器、弥生土器、石器、管玉等を出土し、比較的良好な状態で遺跡が残存していることが予想された。また、この調査によって、集落が丘陵部だけでなく、水の流れや防御に不利な谷部においても、遺跡が存在することが確認され、今後の遺跡の立地を考えるうえで貴重なものとなった。

南平第3遺跡

所在地	西臼杵郡高千穂町大字押方
調査期間	平成7年4月26日～平成7年11月2日
調査面積	1,280㎡

調査主体	宮崎県教育委員会	
	教育長	田原直廣
	教育次長	中田 忠 八木 洋
調査総括	文化課長	江崎富治
	課長補佐	田中雅文
	主幹兼庶務係長	高山恵元
事務担当	庶務係主査	宮越 尊
	主任主事	横山幸子
調整担当	埋蔵文化財第1係	主 査 菅付和樹
調査担当	主幹兼埋蔵文化財	
	第2係長	岩永哲夫
	主 事	松林豊樹
	調査員	米久田真二

平成8年度の調査

平成7年11月に下記の2遺跡の試掘調査後、周辺の土地買収関係が完了したので、平成8年度に南平第4遺跡と神殿遺跡C地区の調査を実施した。この調査で昭和63年から行ってきた高千穂バイパス関連のすべての調査を終了することとなった。

南平第4遺跡

所在地 西臼杵郡高千穂町大字押方
調査期間 平成8年4月22日～平成8年6月11日
調査面積 500㎡

神殿遺跡C地区

所在地 西臼杵郡高千穂町大字三田井
調査期間 平成8年6月5日～平成8年11月8日
調査面積 1,000㎡

調査主体 宮崎県教育委員会

教育長 田原直廣
教育次長 中田 忠
八木 洋

調査総括 文化課長 江崎富治
庶務係長 高山恵元
埋蔵文化財係長 面高哲郎
主 査 菅付和樹（調整担当）

調査・整理

宮崎県埋蔵文化財センター

所 長 藤本健一
副所長兼調査
第1係長 岩永哲夫
庶務係長 三石泰博
主任主事 吉田秀子
主任主事 磯貝政伸
調査第2係長 北郷泰道
主 査 谷口武範（調整及び調査担当）
調査員 米久田真二（調査担当）

平成9・10年度の調査

平成9年度は4遺跡分の遺物整理、平成10年度は遺物整理および報告書作成を実施した。

調査主体	宮崎県教育委員会		
	教育長	田原直廣	
	教育次長	中田 忠 八木 洋	
調査総括	文化課長	江崎富治	
	庶務係長	高山恵元	
	埋蔵文化財係長	北郷泰道	
	調整担当	主 査	柳田宏一
	報告書担当	主 事	松林豊樹

整理

宮崎県埋蔵文化財センター

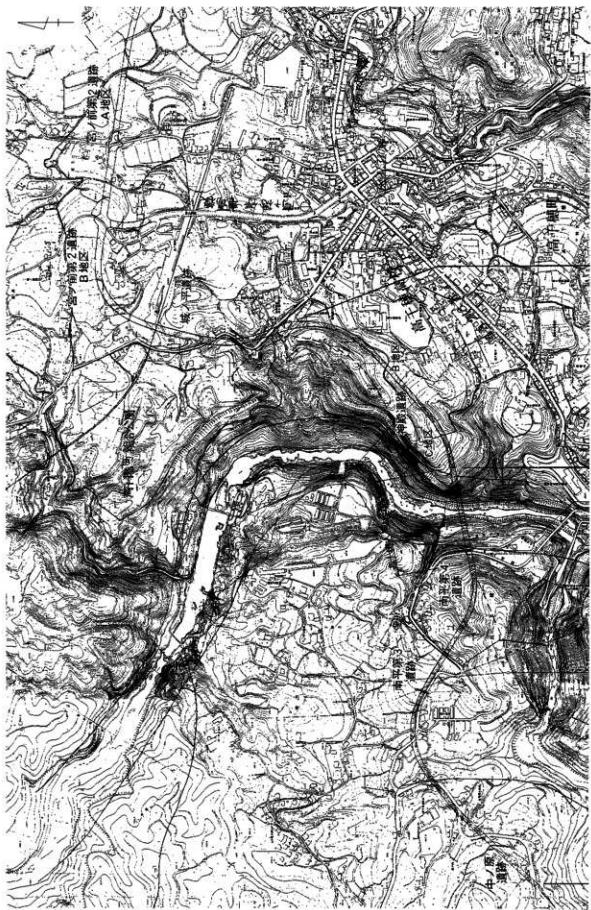
所 長 藤本健一 (平成9年度)
田中 守 (平成10年度)

副所長兼調査

第2係長 岩永哲夫 (平成9年度)
庶務係長 三石泰博 (平成9年度)
児玉和昭 (平成10年度)
主任主事 吉田秀子
主任主事 磯貝政伸
調査第1係主任主事 戸高真知子
調査第2係長 青山尚友 (平成10年度)
主 査 谷口武範 (調整及び整理担当)
調査員 米久田真二 (平成9年度)

調査指導および協力者

賀川光夫 (別府大学名誉教授) 甲元真之 (熊本大学文学部教授) 後藤宗俊 (別府大学文学部教授)
今津節生 (榎原考古学研究所) 緒方俊輔 (高千穂町教育委員会) 成瀬正和 (宮内庁正倉院事務所)



第1圖 運路位置圖

第Ⅱ章 遺跡の位置と環境

1. 遺跡の位置と周辺の地形

神殿遺跡B・C地区、南平第3遺跡、南平第4遺跡、中ノ原遺跡は、宮崎県の北西端に位置する高千穂町内にあり、神殿遺跡B・C地区は、その三田井地区の北西端に、その他の遺跡は押方地区の南部に所在する。

高千穂町は、大分県・熊本県と県境を接しており、北には祖母・傾山系、西には阿蘇外輪山を臨む九州山地の懐の中にありながら、初めて訪れる人を驚嘆させるほど広大な盆地状の地形が拡がり、周囲に連なる鋸歯状とも言うべき山稜を持つ急峻な低山地と相まって、独特の景観を呈している。この地形の特異さを形成しているものは、西臼杵地方の旧河谷を埋没させた更新世の阿蘇火砕流、それによる途轍もなく厚く膨大な阿蘇溶結凝灰岩を再び浸食した五ヶ瀬川とその大小の支流、川の両岸に屏風様にそそり立つ急崖、さらに、阿蘇溶結凝灰岩層の上であって、いくつもの支流の開折により小丘と斜面地が形成された台地状の地形、加えて、周囲の低山地の上層の、浸食されずに先鋒状に残ったチャート層、などである。

こうした平坦部の少ない地形の中にあって、遺跡の立地には、南に面した緩斜面地を選択している例が多く見られる。神殿遺跡B・C地区のある三田井地区は、現在も市街地となっているように、町内で最も居住地に適した緩斜面地が多く、全体的に起伏の少ない地形で、遺跡数も多い。

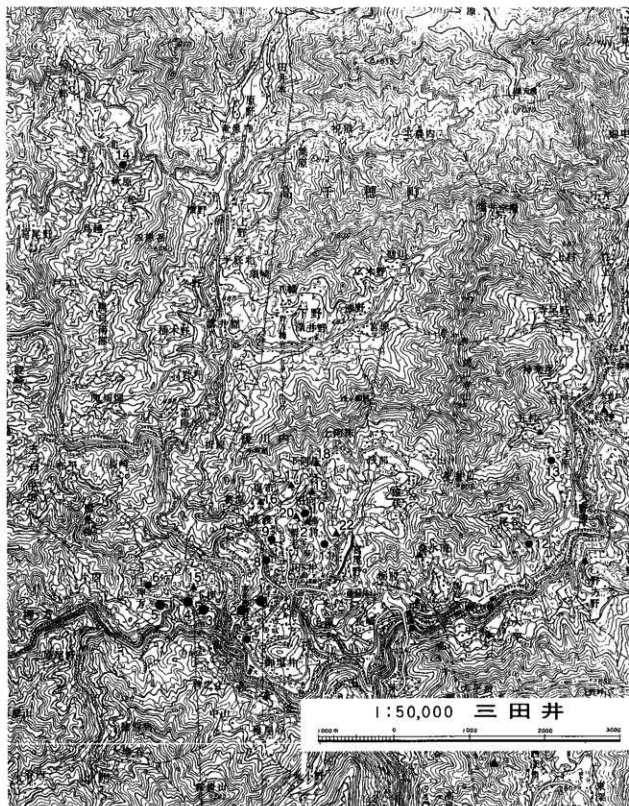
この三田井地区と、南平第3遺跡・南平第4遺跡・中ノ原遺跡が所在する押方地区、そして尾谷地区を合わせた三地区は、いずれも五ヶ瀬川の北岸に形成された比較的広い台地状の地形で、緩斜面地に恵まれており、遺跡の分布の中心となっている。

2. 遺跡の立地と歴史的環境

神殿遺跡B地区は、丘陵に挟まれた谷部に立地し、東側にA地区⁽¹⁾と接している。これらの地区は、縄文～弥生時代の散布地として周知の「高千穂高校遺跡」と一体の遺跡である。調査以前に採集されていた遺物の中には、文字突帯文を持つ弥生時代後期の甕が含まれている。A地区は、B地区と同時に調査されており、谷部のⅠ区では弥生時代終末～古墳時代初頭の住居1軒など、その東側丘陵の南東斜面のⅡ区では弥生時代後期～終末の住居6軒と奈良時代の住居2軒が検出された。出土遺物は、縄文時代晩期・弥生時代中期～古墳時代初頭の土器・石器、奈良～平安時代の須恵器・土師器・製埴土器・鉄器、近世の陶磁器などがある。

B地区のすぐ西側の比較的急峻な丘陵上には、中世の山城である「淡路城跡」が立地しているが、神殿遺跡C地区は、これと同じ丘陵の南側斜面に位置している。淡路城は三田井氏累代の居城で、この地は現在でも「城山」と呼ばれ、付近には、城との関連を思わせる「一祝子(いちのほうり)」という地名も残っている。また、近世に関しては、神殿遺跡A地区Ⅱ区の東側隣接地にある高千穂高校プール敷地内において、建設工事中、この地に伝わる鬼神「鬼八」の伝承に基づいた「鬼八塚」の供養碑(享保年間建立)が発見されている。

神殿遺跡の南側丘陵上には、古代より高千穂地方の政治あるいは祭事を中心として鎮座してきた「高千穂神社」があることから、それに由来するであろう「神殿」地名を持つこの一帯は、古代から近世



- | | | | | |
|-------------|------------|------------|------------|-------|
| 1 神殿遺跡A・B地区 | 7 セベット遺跡 | 13 岩戸五ヶ村遺跡 | 19 吾平横穴墓群 | ▲…横穴墓 |
| 2 神殿遺跡C地区 | 8 城ノ平遺跡 | 14 薄糸平遺跡 | 20 陣内横穴墓 | |
| 3 南平第4遺跡 | 9 宮ノ前第2遺跡 | 15 押方横穴墓群 | 21 車迫横穴墓群 | |
| 4 南平第3遺跡 | 10 陣内遺跡 | 16 塩市横穴墓群 | 22 吾平原横穴墓群 | |
| 5 中ノ原遺跡 | 11 吾平原第2遺跡 | 17 成木横穴墓群 | | |
| 6 押方神社周辺遺跡 | 12 梅木原遺跡 | 18 池ノ川横穴墓群 | | |

第1図 遺跡位置図

にかけて、人々の関心と行動の痕跡を多く残す地であろうと思われる。

南平第3遺跡・中ノ原遺跡は、押方神社周辺遺跡⁽¹⁾などの周知の縄文～弥生時代の遺跡が分布する丘陵地帯の南側斜面に立地し、谷を隔てて約400m東西に離れた位置にある。南平第3遺跡の北側には古墳時代の押方横穴墓群が分布している。南平第4遺跡は、第3遺跡の南東約300mの比較的高い丘陵の先端部に位置している。

高千穂町内における古墳時代までの歴史的動向を概観すると、まず、最も古い時代の遺物は、旧石器時代のナイフ形石器1点で、神殿遺跡の約600m北に位置する宮ノ前第2遺跡⁽²⁾で出土している。続く縄文時代には、草創期の石槍が岩戸五ヶ村遺跡第二次調査⁽³⁾で出土しているのを始め、早期の遺跡には薄糸平⁽⁴⁾・岩戸五ヶ村⁽⁵⁾などの遺跡が確認されている。前期・中期は空白期に近く、後晩期になると遺跡数は一挙に増大する。代表的な陣内遺跡⁽⁷⁾では、西平式・三万田式・御領式などの土器・石器類とともに、県内でも希少な石棒・石刀・土偶など呪術的な遺物も見られ、この時期の人口や生活範囲の拡大、文化的な充実がうかがえる。しかし、住居跡等の遺構は、唯一セベット遺跡⁽⁸⁾において晩期前半の円形の堅穴住居跡が1軒発見されているのみである。晩期末から弥生時代にかけての時期の遺物は、セベット遺跡で刻目のある突帯文土器が出土している。本書で報告する南平第4遺跡は早期の、南平第3遺跡・中ノ原遺跡・神殿遺跡は、後晩期の遺跡に新たに加わる資料となった。弥生時代に入っても前期の遺物は未発見で、中期になって、北部九州に見られる須玖式土器や下城式土器・黒髪式土器などが押方神社周辺遺跡C地区⁽⁹⁾・薄糸平遺跡・吾平原第2遺跡⁽¹⁰⁾などでわずかに出土するのみであったが、報告する南平第3遺跡は、押方神社周辺遺跡の南東側約700mの同一丘陵の斜面にあり、初めて中期の集落が発見されている。後期から終末にかけての時期になると遺物・遺構とも増加し、土器には、大分県大野川流域に特徴的な工字突帯文甕や、熊本県を中心分布する免田式土器など交流範囲の広さを示すものが多く見られる。小規模ながら集落も各所で形成され、岩戸五ヶ村遺跡、梅木原遺跡⁽¹¹⁾、神殿遺跡A地区(6軒)、宮ノ前第2遺跡(7軒)で住居が調査されている。これらに、今回の南平第3遺跡や神殿遺跡B地区(～古墳時代初頭)の調査例もこれに加わる。古墳時代は、墳墓以外の集落や散布地については、宮ノ前第2遺跡で8軒の堅穴住居群が調査された以外、これまであまり知られていなかったが、神殿遺跡C地区では住居3軒が発見され、同B地区では若干の遺物が出土している。古墳には、少数の円墳・箱式石棺も見られるが、最も盛行したのは横穴墓で、三田井地区北部を中心に、押方地区や五ヶ瀬川支流の岩戸川流域にも分布している。

註

- (1) 「広木野遺跡・神殿遺跡A地区」『宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 第7集』宮崎県埋蔵文化財センター 1997年
- (2) 沢 皇臣「宮崎県西臼杵郡高千穂町押方神社周辺の遺跡」『九州考古学』45号 九州考古学会 1972年
- (3) 「吾平原第2遺跡・宮ノ前第2遺跡・城ノ平遺跡」『国道218号線高千穂バイパス建設関係発掘調査報告書』宮崎県教育委員会 1993年
- (4) 岩戸五ヶ村遺跡第一次調査(1992年)調査区の近接地において、高千穂町教育委員会が1998年に発掘調査を実施した。
- (5) 「薄糸平遺跡」『国鉄高千穂建設埋蔵文化財発掘調査報告書』高千穂町教育委員会 1978年
- (6) 岩戸五ヶ村遺跡第一次調査。1992年、高千穂町教育委員会が発掘調査を実施した。
戸高真知子「岩戸五ヶ村遺跡の調査」『宮崎考古学会第27回発表要旨』宮崎考古学会 1993年
- (7) 「陣内遺跡」『日向遺跡総合調査報告 第2輯』宮崎県教育委員会 1962年
「陣内第2遺跡」『埋蔵文化財調査報告 I』宮崎県総合博物館 1987年
- (8) 「セベット遺跡」『高千穂町文化財調査報告書 第3集』高千穂町教育委員会 1984年
- (9) (2)に同じ。
- (10) (3)に同じ。
- (11) 「梅ノ木原遺跡」『高千穂町文化財調査報告書 第4集』高千穂町教育委員会 1985年

こうどの
神殿遺跡 B・C 地区

第三章 神殿遺跡B・C地区の調査

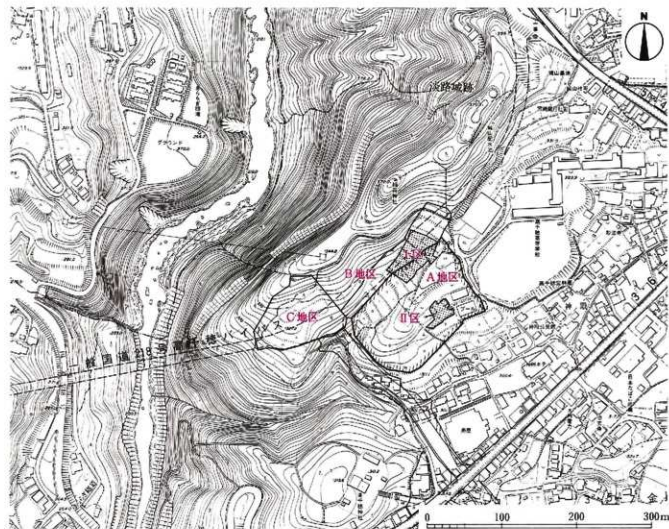
1 神殿遺跡B地区の調査

第1節 遺跡の立地（第1・2図）

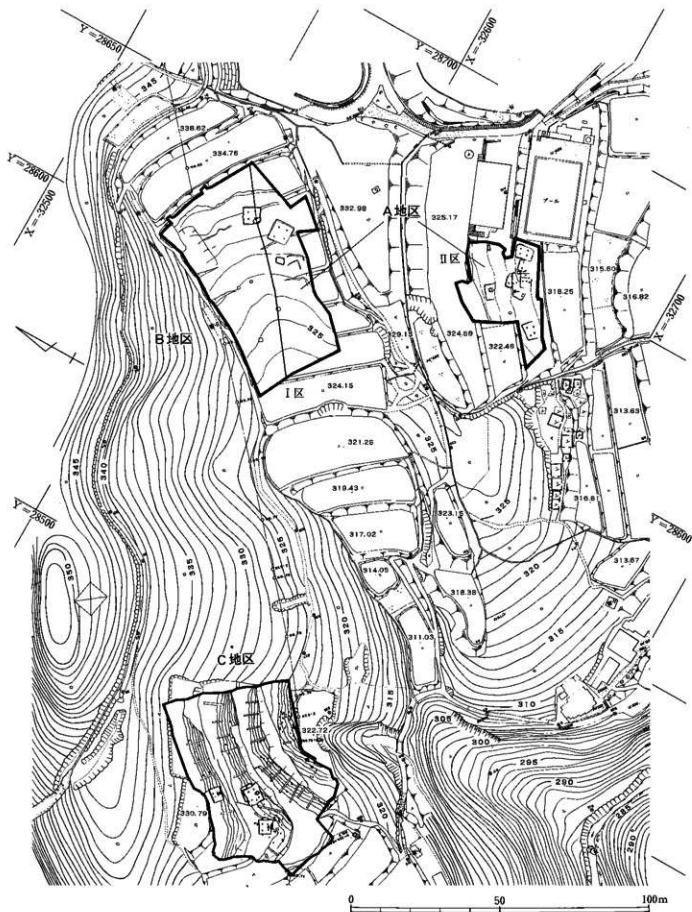
神殿遺跡は、南西に延びる比較的急峻な丘陵（以下、西側丘陵）と南南西に延びる丘陵（以下、東側丘陵）に位置する。これまでのA・B・C地区の調査によって、二丘陵およびその谷部の南面する緩斜面地（標高320～332 m）が、弥生時代中期から古墳時代初頭、奈良時代にかけて居住地に選択されていたことが確認されている。

ここで報告するB地区は、東西丘陵に挟まれた谷状の比較的緩やかな斜面部分にある。ここでは、調査原因の異なる「県立高千穂高校第二運動場建設用地」のA地区と調査区を接しており、両地区を合わせて「I区」としている。

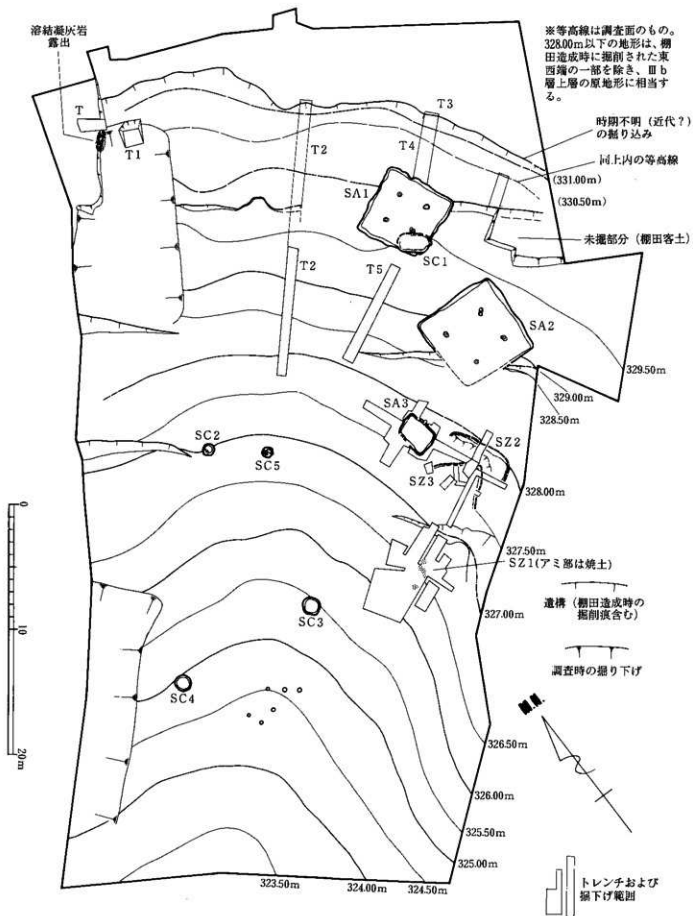
なお、西側丘陵上には中世の山城「淡路城」跡があり、県文化課と高千穂町教育委員会合同の縄張り調査によって構造の概要が知られている。すなわち、最頂部を主郭として周囲を削り込み、小口風の段



第1図 神殿遺跡調査対象区域および調査区位置図（1：5000）



第2图 神殿遺跡調査区周辺地形图 (1:1250)



第3図 神殿遺跡A・B地区(I区)遺構分布図(1/300)

を設けており、丘陵傾斜方向の南西部には段差のある平坦部を造りだして曲輪としている。堀といえるほどの深い掘り込みはない。ただし、本格的な発掘調査を経ていないため、現在曲輪としている段差が確かに当初のものか、若干の疑問もあるようである。

ちなみに、この西側丘陵は、地質図によると上位にチャート層があり、事実、丘陵裾部や調査区内で、石器石材には不適と思われる、やや質の悪いチャート塊が採取されている。この硬いチャート層のために丘陵上部は浸食されにくかったため、周囲の丘陵に比してやや高く急峻な、まさに山城の立地に最適な景観を呈している。

B地区の調査は、東に隣接するA地区の調査と並行して実施している。A地区では、「I区」の東南部と、東側丘陵南側斜面の最も包含層の残存度が高い部分を調査区とした「II区」において、縄文時代晩期から古代にかけての遺構や遺物が検出されている。調査原因が異なる両地区の調査結果については個別に報告せざるを得ないが、遺跡としては一体のものである。そのため、神殿遺跡の全容を把握するには、B地区のみならず、次節で報告する西側丘陵南端斜面地のC地区およびA地区※それぞれの調査結果を合わせて検討すべきことを記しておく。

※ 報告書刊行済み。

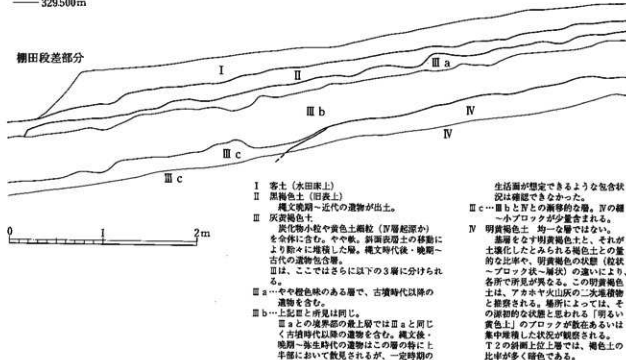
「神殿遺跡A地区」【宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 第7集】、宮崎県埋蔵文化財センター 1997年

第2節 調査の概要

調査区の設定と調査の経過

調査は、まず試掘調査の結果をもとに、調査対象区域のうち東西丘陵間の谷部の、遺構存在の可能性が最も高い「遺物を比較的多く包含するとともに原地形の最も緩やかな範囲」を優先的に選んで調査区

— 329.500m



第4図 神殿遺跡B地区トレンチT2土層断面実測図(1/40)

「I区」を設定し、その調査結果の如何によって調査区の拡張を検討することにした。この「I区」は先述のとおり調査原因によりA・B両地区に分割されているが、調査は同時併行のため、B地区の調査の経過については、I区全体について報告する。

谷部以外の、同じく調査対象区域の西側丘陵東側斜面については、調査開始時に踏査して「淡路城」関連の遺構存在の可能性について検討した。その結果、人為的に改変されたと見られる箇所は確認され

第1表 神殿遺跡I区 検出遺構・遺物 (太子遺構はB地区。斜体字遺物はA地区で報告済みのもの)

時代	時期	出土位置	出土遺物 (破片の付記のないもの数値は簡体数相当の破片数、またはコンテナ(容量約12ℓ、単位◎)数)	
			↓土器、陶器・磁器(中世~)	↓石器、鉄器
縄文	(後期?) 晩期 末	包含層 (Ⅲb~ Ⅲa層)	土器: 6◎ 精製浅鉢30+2◎(胴部片主体) 粗製浅鉢6 } +2◎(胴部片主体) 深鉢4 漆織土器3 突帯土器(割目無し) 7 突帯土器(割目有り) 19 器種不明の土器 8 丹塗り磨研土器小片(弥生?) 約30 その他	石器: 3.5◎ 石鏃12、石鏃未製品1、尖頭状石器2、石鏃2、スクレーパー10、尖入石器1、微形石器? 1、石鏃1 剥片石器未製品4、二次加工剥片3 剥片 約60 石核(チャート13、黒曜石1) チャート原石2 打製石斧?、磨平打製石斧3、 磨平打製石斧未製品? 1、 磨製石斧 未製品の剥片類1◎(弥生以降の遺構内出土)
			円板1(土器片利用)	
弥生	中期~ 終末	包含層 (Ⅲb~ Ⅲa層)	土器: 5◎ 磨製系(磨製式・中期) 壺2 粗製系3◎ 叩き磨製壺、 壺(ナメ)、壺(ハケ目) 複数突帯付胴部(壺または壺)小片4 } 1.5◎	石器: 磨製石包丁(未製品)片1 磨製石鏃1、磨製石斧? 片1 磨石1 小磨平打製石斧1 (石包丁未製品?) 鉄器: 鉄鏃1
			SA1 (堅穴住居)	土器: 2.5◎ 粗製壺3(うち1はほぼ完形)、粗製製片1◎ 叩き磨製壺2+壺、壺(ハケ目)4
古墳	終末 古墳 初期	SA2 (堅穴住居)	土器: 7◎ 粗製壺13、叩き磨製壺2 複合口縁壺3、壺3、鉢3 高坏2、ミニチュア土器2 丹塗り高坏(部付?)1、丹塗り割目突帯付土器1 (上記報告分以外に、粗製製片3◎はか、 上記器種の破片2◎有り)	石器: 磨製石包丁1、磨製石斧1 磨石1 磨平打製石斧2 (混入の縄文遺物?) 鉄器: 鉄鏃1
			布留式系?の小型壺?片3(包含層中にも破片約10有り)	磨製系金具? 2
奈良~ 平安	奈良~ 平安	包含層 (Ⅲa層)	土師器: 丹塗り坏蓋1、壺2 須恵器: 坏蓋1、坏身1、罎1、壺	鉄器: 鉄鏃2 鉄鋸基部? 1
		SC1 (土坑)	土師器: 甕口縁1 (土坑の年代: 古墳~平安時代の範囲)	
中世	中世	包含層 (Ⅱ層)	土師器: 坏蓋1、坏底蓋?1、高台付坏1、壺 須恵器: 坏蓋2、坏身3、高台付坏3、壺5、甕 布直土器片1 輸入陶磁: 阿安窯系青磁 破片1(12世紀)	
		SC2~5 (土坑)	輸入磁器: 豊原窯系青磁 破片1(14世紀前半) 源不明の青磁片2	
近世	近世	包含層 (Ⅱ層)	磁器: 肥前系染付磁器 蒔・鉢1、その他 産地不明の染付レンゲ1、人形1、その他 陶器: 唐津系白土象嵌 碗1・器種不明1 内野山窯 皿1 無銘(垢器) 鉢1、その他	1◎
		SA3 (堅穴?)	粗製壺(土師器の可能性も)、弥生壺片1、ほか全部で1◎	石器: 滑石製器種不明磨製石器1 板状磨製石器(石版?) 1
不明	弥生?	SZ1~3 (堅穴?)	SZ1...土器片0.5◎ SZ2・SZ3...弥生粗製壺4、壺? 1、ほか土器片1◎ (遺構の年代は、弥生~古墳の範囲内)	鉄器: 板状鉄片1、塊状1、棒状1 鉄鏃? 粗製小片1 (上記は弥生末~古墳の可能性も あり)
		包含層	無銘陶器(垢器): 壺(板状文様入) 1	釘? 1、短刀状1、槌状1

ず、地形が急斜面のうえ、斜面裾部では阿蘇熔結凝灰岩が露出するなど堆積土層の状態が悪いため、遺構存在の可能性は低く、掘り下げ調査も困難と判断し、発掘調査区からは除外した。

さらに、I区上部の棚田二面についても包含層の状態と遺構検出の可能性の有無を調べるため、棚田段差と垂直な方向に2本のトレンチを重機で掘削して断面を観察したが、原地形が極めて急斜面で土層の堆積状況が悪く、包含層や遺構も確認できなかったため、この地点については調査を行わないことにした。対する調査区より下部の斜面地については、試掘時に少量ながら遺物が出土したものの、すでにI区調査区内においても、徐々に傾斜が急になる下半部には特筆すべき遺構や遺物の量が少ないと判明していたため、さらに下に向かって急斜面になる原地形と遺構検出の可能性、除去する膨大な土量と作業量などを考慮して、下方への調査区の延長は断念した。

基本層序と調査の経過

I区の基本層序は第4図・第9図・図版1を参照されたい。

I区の調査開始にあたっては、水田床土を重機で除去した後、まず随所に土層確認のトレンチを設定して土層の堆積状態を確認し、調査面の設定を行なった。

I区の遺構検出面は、概ねⅢa層下～Ⅲb層上層であるが、SA1とSA2(A地区)のある北東部の2面の棚田下の遺構検出面は、削平によりIV層が露出あるいは失われている箇所が多い。

縄文時代の遺物包含層(Ⅲb層)は、生活面に相当するような単一時期の文化層が形成されておらず、さらに、包含される遺物も、時間の経過とともに本来の位置を離れ、斜面上を流動して堆積したものであるため、縄文時代の本遺跡の内容を知る上で、遺物の出土地点や出土量の綿密な情報は必ずしも重要ではないとみなし、調査区内の包含層全面の掘り下げは行っていない。結果として、縄文時代の遺物は、遺構検出面までの掘り下げ土、トレンチ内や遺構の埋土中などから出土したものが中心となっている。包含層の内容は、遺物の時代から晩期を中心としたものであるが、この他、アカホヤ火山灰を含むとみられるIV層以下の「早期・草創期の遺物包含層の有無」については、IV層以下をかなり深く掘り下げているSA1・SA2の壁面の土層に遺物が発見されなかったのははじめ、それら遺構の埋土はもちろん、遺跡全体の掘り下げ土を見ても、早期・草創期と断定できる遺物が1点も出土していないことから、「包含層は無い」と判断した。ただし、石器については、出土石器中に早期のものが混入している可能性があるが、形態・石材等の属性に早期特有のものを認めたいので、抽出は困難である。

なお、調査期間中、8月2日には高千穂高校の社会科の授業として、また、9月10日には一般住民を対象に、現地説明会を行なっている。

検出された遺構と遺物

神殿遺跡B地区で検出された遺構は第1表のとおりで、弥生時代終末から古墳時代初頭にかけての住居1軒(SA1)、古代以前と推定される土坑1基(SC1)、中世以降とみられる時期の限定できない土坑4基(SC2～5)がある。

この他、調査区南部でピット数基が検出されたが、性格は不明である。また、SA1の北側には、地形傾斜に直交する方向にのびる段差と平坦面が検出された(第3・9図、図版1左下)。この掘り込みの時期は不明だが、棚田の大規模な造成直前、すなわち近代の遺構の可能性が高い。

神殿遺跡で出土した遺物の時代と内容については第1表のとおりで、縄文時代後晩期から近世にかけてのものが出土した。淡路域に関連する可能性のあるものとしては、龍泉窯系の輸入青磁1点があるの

みである。A地区の報告書中で、B地区出土の鉄鏝2点を中世のものとして報告したが、再検討の結果、時期判定が困難なため、ここでは古墳時代から古代に至る時期のものとして扱い、報告は歴史時代の項で行う。

出土した土器は、全体に細かい破片状態のものが多く、時代や器種を細分しがたい。とくに、縄文後晩期の粗製土器・弥生時代の甕・奈良時代の土師器厚手甕の三者は胎土が近似していることから、調整や器形が明らかでない類似土器片については時期判定に迷うものも多く、厳密な時期分類はできない。

第3節 縄文時代の遺物

縄文時代の遺物は、包含層(Ⅲb層)中より土器と石器が出土している。

土器(第5~8図、図版4~6)

土器は、晩期後半から終末にかけてのものを主体としており、精製の浅鉢、深鉢、突帯文土器、組織痕土器などの容器類の他、土器片を加工した円板が1点(第8図80)出土している。

ただし、小破片のものや、器面が風化しているものが多いため、図化可能な点数に限られるとともに、個々の器形の推定復元や器種の判定にも困難なものがある。ここでは、以下、主に口縁部をもとに大まかに分類したが、先のような理由で不確定な面もあることを断っておく。土器1点ごとの所見については土器観察表(第2表-)を参照されたい。

a. 精製浅鉢(第5・6図 1~30)

1~18は、屈曲する胴部・外反する頸部・屈曲して上方に延びる短い口縁部を持つ形態である。

13の内外面と14外面には赤色顔料が付着しており、県工業試験場に依頼した分析結果から顔料はベンガラと判明している。21~26は、内傾する口縁部または外傾し端部が外反する口縁部や胴部との境界に屈曲部をもつ精製の土器で、口縁部上方や屈曲部直上に沈線が施されている点共通している。これらは、胎土や色調も非常に近似している。

b. 粗製浅鉢(第6図 31~37)

精製浅鉢と異なり、粗い胎土・調整の浅鉢と思われるもの。31~34は、水平位に平行する沈線が数条入る。35は条痕調整の内湾しつつ外傾する口縁部で、下端には体部と境をなす屈曲部がある。36は、ミガキに近いヘラナデを粗雑に内外面に施している。37は小型のボウル状の鉢の口縁と考えるとここに分類したが、小型深鉢の可能性もある。

c. 深鉢(第6図 30、38~40、第7図 44)

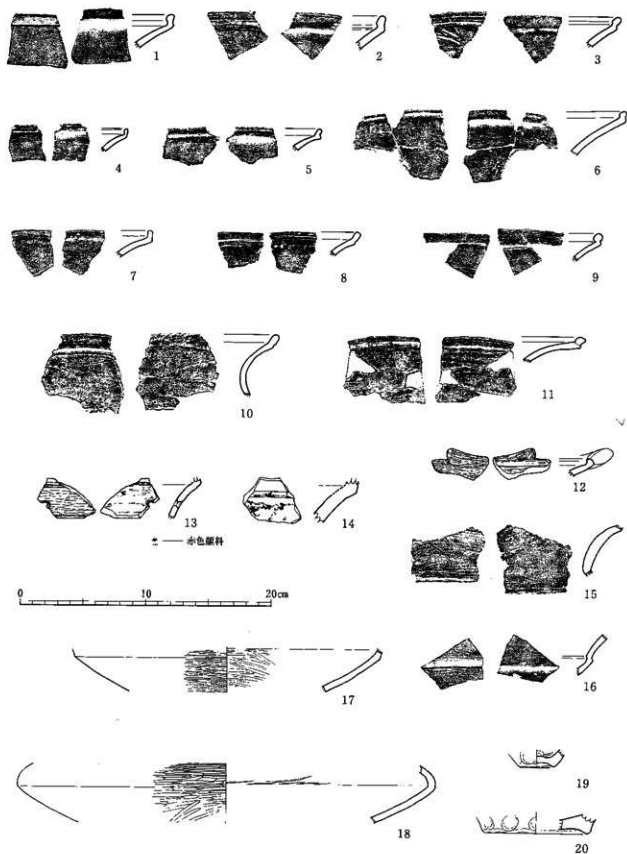
口縁部のみで器形がはっきりしないが、傾きや推定口径から深鉢とした。30のみ内外とも丁寧なナデ調整で、精製土器に近い感がある。38・39は粗い胎土・調整。40は外面に水平位2条と斜位1条の沈線文があるが、破片のため文様の全容は不明である。

d. 刻みのない突帯文土器(第7図 44~47、50~53)

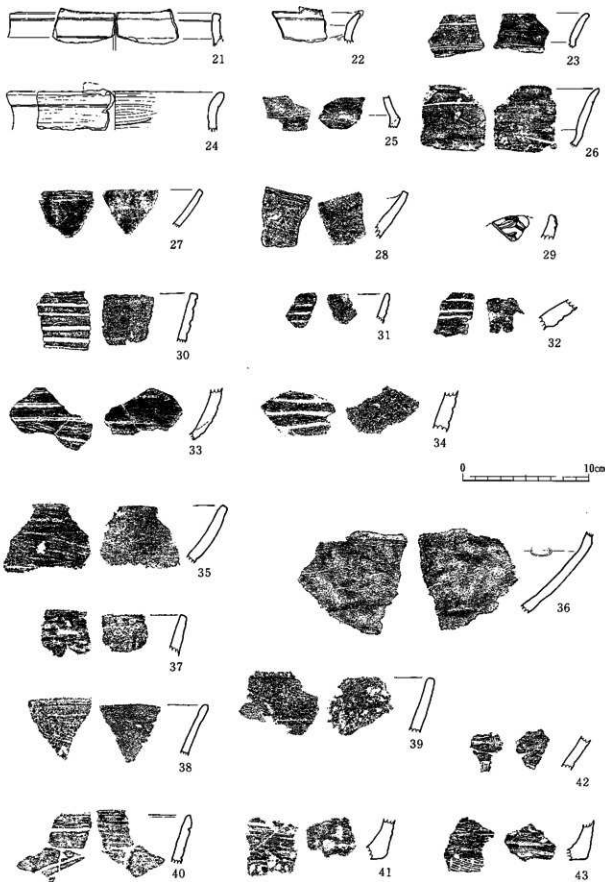
刻み目のない突帯を口縁部外面上方または口唇部直下に貼り付けた深鉢形土器。口縁部や突帯の大きさ・断面形は、各々異なっている。

e. 刻み目突帯文(第7図54~71)

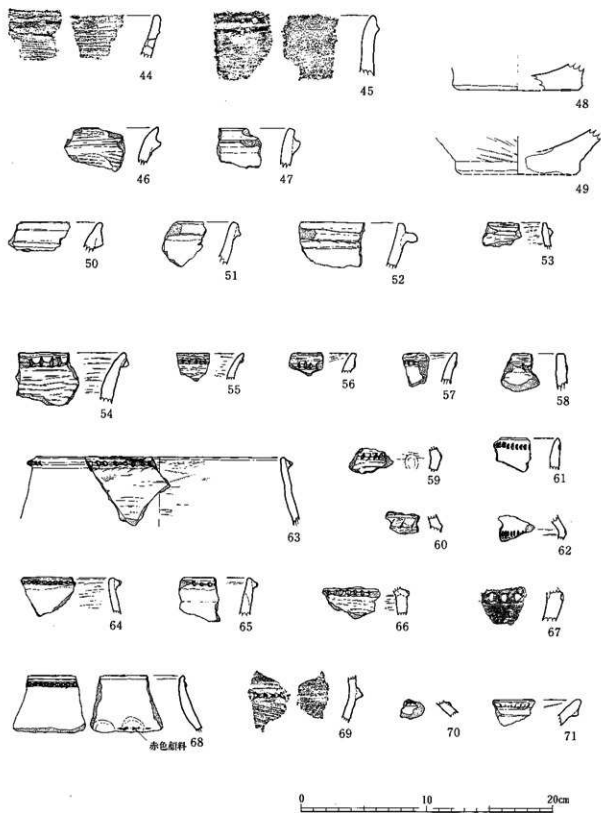
口縁部外面の口唇下や胴部の屈曲部に貼り付けた突帯に刻み目や連続刺突文を施した土器。59~62のように、突帯を付けずに直接施文しているものもあるが、同じ様相を持つためこ



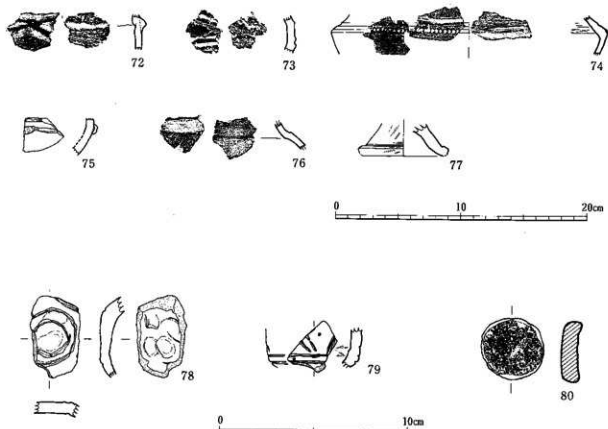
第5図 神殿遺跡B地区出土縄文時代の土器(1)



第6図 神殿遺跡B地区出土縄文時代の土器(2)



第7図 神殿遺跡B地区出土縄文時代の土器(3)



第8図 神殿遺跡B地区出土縄文時代の土器(4)

に含める。深鉢形の器形が中心だが、68・70は壺形、71は鉢形とみられる。小型器種の55～57の口唇部には連続した浅い窪みが観察されるが、これが刻み目か欠損によるものかの判別は微小なため難しい(図版5)。65は丹塗り。68内面には赤色顔料の付着があるが、分析によりベンガラと判明している。

f. 組織痕土器(第6図 41～43) 41・43は底部に、42は胴部下に縞状の組織痕がみられる。

g. その他(第8図 72～79)

器種の不明なもの、特殊なものは「その他」として一括した。78・79は、沈線による文様が施された器種不明の土器である。また、図化できなかつたが、器種不明の丹塗磨研土器の小片も出土している。

石器(図版6)

縄文時代の石器は、石鏃、スクレーパー、石匙、石核(チャート・黒曜石)、剥片、二次加工のある剥片、チャート原石、扁平打製石斧、磨製石斧、磨製石器片などが出土しているが、紙面等の都合上、実測図は掲載していない。

第4節 弥生～古墳時代の遺構と遺物

この時期の遺構は、堅穴住居跡1軒(SA1)が検出されている。

この他、SA1南部隅でSA1を切る土坑SC1(第12図、第6節時期不明の遺構の項参照)につ

いても、古墳時代の範囲に入る可能性がある。

弥生～古墳時代の遺物は、上記遺構内および包含層より弥生土器・石器・土師器・須恵器が出土している。土器類は、小破片で器種や器形がわかりにくく、時期が特定できないものが多い。

壜穴式住居跡 SA1 (第9～11図)

SA1は、I区北東部に位置し、ほぼ同時期とみられるSA2 (A地区)と隣接する。この位置は、V字形につながる東西丘陵の分岐点の下で、丘陵からの堆積土により谷部が埋まり、上部からの傾斜が緩やかになり始める部分に当たる。

住居の規模および構造はSA2と類似しており、平面形はほぼ正方形で、柱は4本である。規模は、主軸長(東北東～西南西方向)5.84m×最大幅5.92m、深さ1.19m(北東隅)を測る。

床面中央東寄りには、炭化材片と焼土が集中して検出された不整形の掘り込みがあるが、焼土は粒状～小塊状のものが多く混じるとい程度で、しかも、焼土の混じる土は、床面上約10cmの位置まで拡散している状態であった。このような状況の中、継続使用する「炉」と直接結びつけられるような火熱を受けた「焼土面」は確認されなかった。

また、住居廃棄後の遺構埋没中途段階での焼土粒集積面が数箇所、住居北東端部の埋土②(第10図)の上面から埋土①下層にかけて観察された。

トレンチ断面では、貼床土のアーカが確認されたが、貼り土前の掘り込みの検出作業ができなかったため、貼り床が地形の傾斜に沿うものか全面に及ぶものかは確認できなかった。

遺物は、床面直上で出土したものは、89の甕底部と土器小片があるのみであった。埋土中からは、粗製甕(88)と、石包丁とみられる打製石器1点(97)の他、叩き調整の壜片(81・82)、ハケ調整の壜片(83～85)、粗製壜片などが出土した。86の粗製の土器片も埋土中出土であるが、器形に類例が無く、また、調整や胎土に縄文時代の土器の可能性を否定できない様相があることから、ここでは積極的にSA1に伴う遺物とすることができない。

88の粗製甕は、第10図に示したように、住居廃棄後、隅もなく流入・堆積した埋土②の上方北東側から廃棄されたものである。これと、A地区SA2内出土の底部(A地区報告書第15図16)が接合したことから、同一個体の上半部のをSA1内に、底部をSA2内に廃棄したことが明らかになった。

遺物の接合状況・埋土の堆積状況から、住居は短期間のうちに埋没したと推察され、埋土中の遺物もSA2と大差ない時期のものであろう。

弥生時代から古墳時代の遺物は、先述のSA1内出土遺物の他、SC1内、SC5上層、Ⅲb層およびこれより上位の層から出土している。包含層出土の土器中、弥生時代と断定できるものは少ない。弥生土器の可能性のあるものとして、91の甕口縁、92の壜口縁、93の壜、94の口唇部に刻み目のある壜口縁があるが、91～93は古墳時代の可能性もある。特に92は、弥生時代の土器には通常見られないほど薄い作りで、古墳時代の布留式土器を連想させる。90は、SC5の遺構範囲内の検出面より上層から出土した土器であるが、やや縄文土器的な趣を持つものの、口唇部形態や調整、粗製甕に類似する胎土に弥生土器の可能性をより強く認め、ここに掲載した。

弥生時代の石器には、磨製石鏃(96)、磨製石包丁片と思われるもの(95)、97と類似形の板状石器片で、表裏を研磨したもの1点などがある。95は、緑灰色の頁岩製。図の上方が刃部で穿孔がある。現存長4.2cm、現存幅3.3cm、最大厚0.4cmである。96は、濃緑灰色の頁岩製で、基部の片側と先端

部を欠く。現存長3.7cm、現存幅1.3cm、最大厚0.35cmである。

古墳時代の遺物として報告できるものには、土師器と須恵器がある。土師器は、99の丹塗りの須恵器模倣の坏1点のみである。内外面とも丁寧にヘラ磨きされている。蓋として掲載したが、坏身の可能性もある。須恵器には、102の坏蓋、103の坏身、104の趾口縁部があり、時期については、103は法量の小ささと受け部の丸さから6世紀末に、104は形状と文様から5世紀後半と推定される。また、113は下半に叩き調整のある小型球形の胴部で、接合しない2片を図上で復元しているが、胎土の近似や大きさから104と同一個体の可能性が高い。その他、古墳時代の可能性のあるものとして、115・117、甕119～132、さらに鉄器139～141があげられるが、時期が確定できないため、これらは次の「歴史時代」の項で報告する。

第5節 歴史時代の遺構と遺物

歴史時代の遺構には土坑があり、小型円形のSC2・SC5、円形のSC3・SC4の合計4基が検出されたが(第12図)、時期を確定できるものはない。しかし、いずれもⅢ層上面で検出し、埋土がⅡ層を基にしていることから、中世以降であろう。規模は、SC2の長さ0.80×幅0.77×深さ0.23(m)、同様に、SC3は1.32×1.26×0.37、SC4は1.21×1.14×0.51、SC5は0.73×0.68×0.24である。

土坑には、この他前節でふれたSC1があるが、埋土にⅡ層が全く含まれないことから、古代の遺構として歴史時代にまで下る可能性がある。

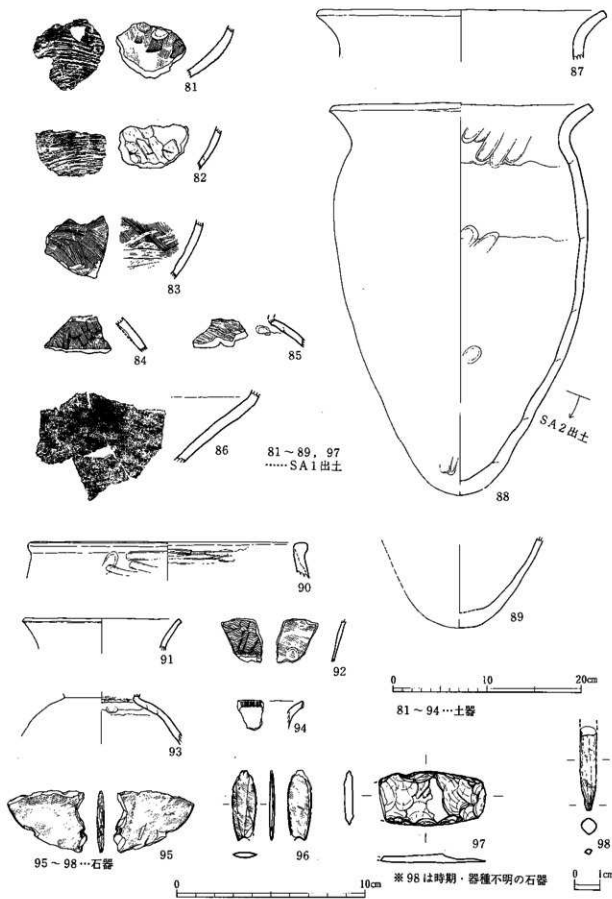
歴史時代の遺物は、Ⅲ層上層より上位で出土しているが、中世以降の陶磁器類などの遺物はⅡ層(旧表土)およびⅠ層(耕作土・現表土)から出土している。遺物の内容は、土師器、布痕土器、須恵器、陶磁器、鉄器であり、遺物の時期は、A地区Ⅱ区と同様、奈良時代(8世紀代)を中心とするものが多く見られる。

当初期待されていた中世の「淡路城跡」に関連する遺構は残念ながら検出できなかったが、当該時期の遺物として、龍泉窯系の青磁1点のみ(第14図142)を得ることができた。A地区報告時に中世の遺物として報告した鉄鏝2点(140・141)は、その後の形態等の検討から、時期は中世には至らないとみられる。

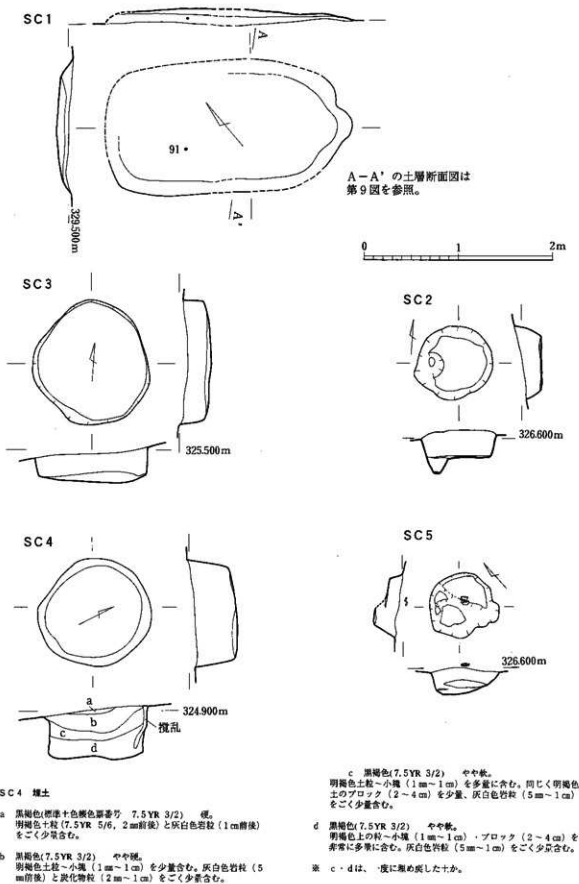
以下、挿図(第13・14図)に沿い、遺物の種類・時期ごとに出土遺物について述べる。

土師器は、図化した坏蓋(100)・高台付坏(101)の他、甕と見られる内面に削り痕のある胴部片も若干出土している。100は、手持ちによるヘラ削り調整で、器形全体が不明だが、8世紀前半代もしくは7世紀代まで遡るものと思われる。101の時期は、高台の位置や形状から8世紀前半であろう。

須恵器は、坏蓋(105・106)、坏身(107～109)、高台付坏(110～112)、壺(117・118)、甕(119～134)が出土している。坏蓋は、やや丸みを帯びた三角形の口縁端部形状から8世紀後半～末、高台付坏も、高台の残る2点については、その形状から坏蓋とほぼ同一時期と思われる。壺118は、8世紀代の高台が付くタイプであろう。117は小型の壺の肩部であるが、小片のため器形が不明で、古墳時代の遺物の可能性もある。これらの他、壺の可能性のあるものとして、114の口縁部、115の肩部、116底部があるが、いずれも全体像がつかみにくく、114は摘みの付く蓋、115は丸底の壺底部、116は高坏坏部、などといった別の器種も想定される。報告者の関連資料の調査不足を反省するとともに、



第11図 神殿遺跡B地区出土弥生~古墳時代および時期不明の遺物実測図



第12図 神殿遺跡B地区土坑 SC1~5実測図 (1/40)

類例を待ちたい。

甕は、出土須恵器中の破片数が最多であるが、調整や器形に古墳時代との著しい差異が認められないため、ここでは一括して報告する。口縁部は図示した2点のみであるが、類例を探し出せず、時期の特定はできなかった。胴部片は、外面に平行叩きを施したものが多く、そのほとんどは、木目と直行する平行線を彫り込んだ叩き板を使用している。また、内面は、同心円の当て具痕を残すものと、ナデ消しているものがある。133・134は、平安時代の甕に特徴的な粗大な格子目の叩きを施している。135・136の赤褐色の甕片は、外面に叩き痕、内面に当て具痕が残る点など須恵器の系統を引くが、類例が無く、産地・時期ともに不明である。137はSC4出土の小片で時期不確定だが、古代の須恵質の鉢と推定される。

138は布痕土器片で、外面に光沢のある灰色付着物がある。

142～144は中国産の青磁である。142は龍泉窯系で14世紀、144は同安窯系で12世紀代の製品である。143は特定しがたい。

145～149・151は国産の磁器で、18世紀後半を中心とする肥前系の染付碗・鉢である。磁器には、152の型作りの人形や153のレンゲもあるが、これらは近代の遺物の可能性がある。

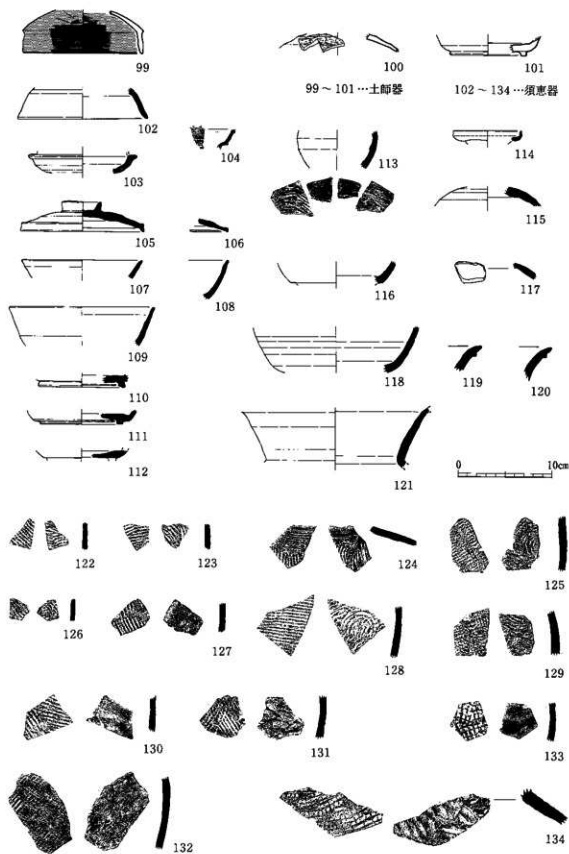
陶器には、150の唐津系の白土象嵌の碗の他、図示しなかったものに、18世紀後半の内野山窯（佐賀県嬉野町）製の皿などがある。

鉄器は3点出土している。139は器種不明で、基部先端は屈曲している。これが本来の形状か事故によるものかは不明である。140・141は鉄鏃で、140は方頭、141は鏃身頭部の上面が丸みを帯びた方頭である。140には茎先端部に巻いた繊維が、141には矢柄の木質と樹皮が一部残る。関の形状は、X線撮影を行っていないためわかりにくい。鏃身部と茎部の間に鈍角の段差が認められる。計測値は、139は現存長3.67cm・現存最大幅1.13cm・上端部推定厚0.15cm、140は身の長さ3.95cm・上端部幅推定2.3cm・現存厚0.35cm、基部最大幅0.50cm、最大厚0.35cm、141は全長11.75cmで、身の長さ推定5.9cm・上端部幅3.4cm・厚さ錆化著しく不明、基部の長さ推定5.0cm・最大幅7.45cm・最大厚0.52cmである。

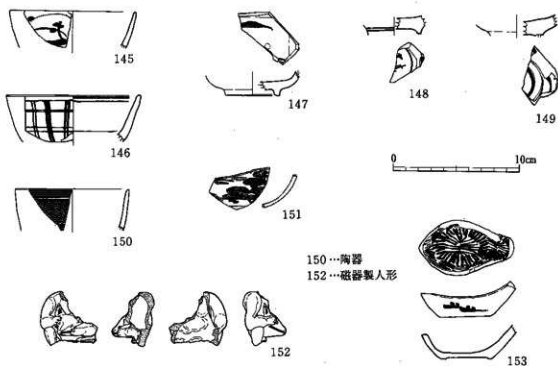
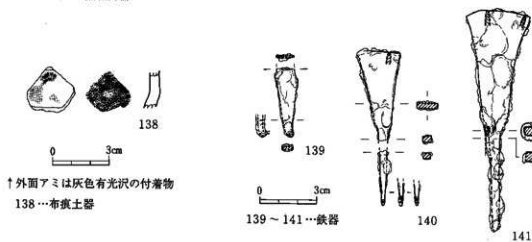
第6節 時期不明の遺構と遺物（第12図）

時期が限定できない遺構は、土坑のSC1である。形状は隅丸の長方形に近く、最大長2.62m、最大幅1.42m、最大深0.17mである。SC1は、SA1の南隅部を切るが、検出面のレベルから、SA1の埋土がSC1検出面以上まで堆積した時期以降の掘り込みと考えられる。埋土にII層起源の土が全く認められないことから、SC1の時期は、SA1の時期から、II層が堆積する以前の間ということになり、古墳時代初頭～古代の範囲内であろう。弥生～古墳時代の土器片が1点のみ（第11図91）出土している。

時期不明の遺物には、器種不明の石器（第11図98）がある。形態は磨製の石錐に似るが、使用石材が軟質の滑石であるため、錐の用途は考えにくい。基部は円柱状に丁寧に研磨され、先端部は、おそらく鉄製の小刀様の工具で鉛筆を削るように整形されている。これをさらに面取り状に研磨整形した際の擦痕が最先端部に観察されるが、連続する横方向の強い擦痕はなく、やはり錐としての使用の可能性は極めて低い。



第13図 神殿遺跡B地区出土古墳時代~古代の土器 (1/4)



第14図 神殿遺跡B地区出土遺物

第7節 まとめ

神殿遺跡B地区では、調査の結果、縄文時代晩期から近世までの遺物が出土し、遺構は、弥生時代終末～古墳時代の堅穴式住居跡1軒と、それ以降の時代の土坑5基が検出された。

B地区とともに、隣接するA地区、次項で報告するC地区の状況とを合わせて見ると、神殿遺跡には、縄文時代後晩期より近世にいたるまで、やや断続的ながら生活の痕跡が認められる。その間、この地を生活の拠点として小規模ながら集落を形成していたのは、弥生時代後期前半から終末（A地区Ⅱ区 5軒）、弥生時代終末から古墳時代初頭（A・B地区Ⅰ区 2軒）、古墳時代前半期（C地区 3軒）、間が空いて奈良時代（A地区Ⅱ区 2軒）においてである。中世には、西側丘陵の頂上部に淡路城が造営されたが、調査区内で城に直接関わる遺構は検出されていない。B地区では、中世の遺物として龍泉窯系青磁が1点のみ出土している。

B地区の調査による成果を見ると、まず、遺構については、検出数が少ない中、弥生時代終末から古墳時代初頭の住居跡SA1は良好な検出状況で、当該期の山間部斜面地の住居の形態や埋没状況を知ることのできる一資料となった。ただし、時期については、SA1に確実に伴う遺物が極めて少ないため、SA2の時期に準拠させざるを得ない。これは、SA1の住居廃絶後に間もなく堆積した埋土中より出土した粗製甕（88）が、近接するSA2（A地区）の埋土中出土のものと同接した事実から、2軒がほぼ同時期に廃絶されたことが理解されるからである。この甕片は、双方の住居とも北東側から中央に落ち込む形で出土し、まとまった部位に接合復元しているが、これは、土砂の流入など自然な原因よりも、人為的に投入された結果と想像される。これが単なる廃棄行動か、それ以外の意図によるかについては興味のあるところだが、行為以前の甕の状態が不明なので言及できない。

さて、SA1と同時期のSA2の時期であるが、A地区報告時に、埋土上層出土でSA2には伴わない古墳時代の布留式系の土器として捉えていた小型の甕または壺とみられる「外面に細かいハケ調整を施した、器壁が薄い土器片」約10点（第15図166～169、ほか）が、その後の出土状況の再検討によりSA2に伴うと判断できたため、時期判断に微妙に関わることになった。これらは、C地区で出土した布留式系土器と比較すると、その特徴としての「内面のケズリ調整」や驚異的な「器壁の薄さ」が認められないうえ、器形の全体像が不明で、胎土は精製されているものの際だつて異質というものではないため、布留式系土器とは認定しがたい。しかし、やはり他の出土土器と比べるとやや異質な印象があり、布留式土器の影響を受けている可能性が高いと思われる。その場合、SA2・SA1の時期は古墳時代前期にまで下ることになるだろうが、類例のない現段階においては躊躇せざるを得ないので、ここでは再検討の余地を残しつつ、A地区報告時と同じく、弥生時代終末～古墳時代初頭としておく。

次に、B地区の遺物について見ると、縄文時代後晩期の土器では、晩期末の突帯文土器が目目され、古墳時代から古代を経て、中世にかけての遺物は、少量ではあるが、この地域の当該期資料の乏しさを補うものである。また、近世の陶磁器類は、肥前系を中心とした製品の流通を示すものであった。ここでは、縄文時代の土器について若干述べておきたい。

縄文時代の土器は、時期細分できない斜面堆積の包含層に、晩期後半を中心に、後期後半に遡るものから晩期末の突帯文土器までの土器を一括して含んでいる。これらのうち、特に突帯文土器群は、小破片主体のうえ量的に決して多いとは言えないが、ある程度まとまった資料としては県内でも数少ないうちのひとつで、貴重である。

突帯文は、晩期後半後葉の刻目の無いものと、晩期末の刻み目のあるものに大別されるが、無刻目突帯文土器のうち、突帯文なのか、単なる粗製深鉢か、口縁形状からは判断しがたいものも存在する。44は、条痕調整時に残った微隆起部分が帯状に見えるものである。46・47は、粘土紐を貼り付けて肥厚させた口縁部の外面に深い凹線を入れることで結果的に端部が上を向く突帯が生じたとも見られるもので、同じ高千穂町の宮ノ前第2遺跡でも出土している。突帯文の出自を考えさせる資料である。

刻目のある突帯文には(後述のⅡ区出土資料をも合わせ)、突帯の位置・有無、施文方法や施文位置等にバリエーションが見られる。こうした多様性が、もともと刻目突帯文の様式に内包されているものなのか、あるいは地域性や時間差によるものかについては、周辺地域の今後の蓄積資料を分析していく際に留意しておかねばならない。

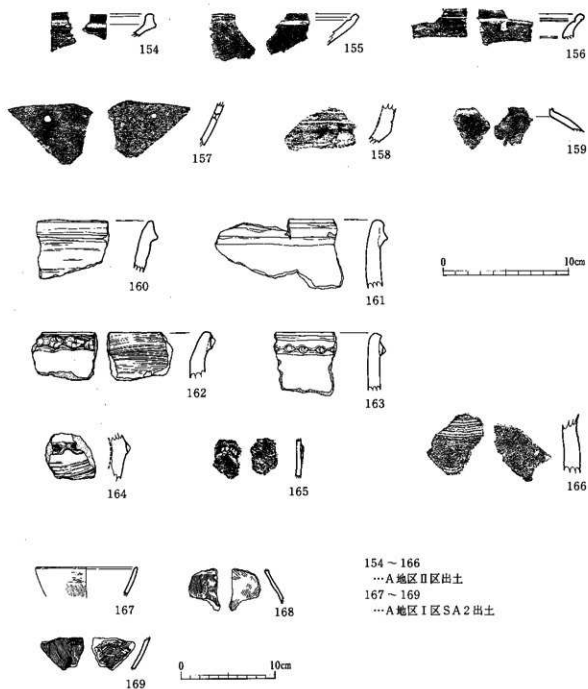
同じく包含層出土の、組織痕土器や、21～26の口縁部外面に1条ないし2条の沈線があり、やや内傾する口縁と胴部との境が屈曲する浅鉢、29の波頂部に沈線文のある波状口縁の浅鉢は、九州他地域での様相から刻目突帯文土器に伴うものと考えられるが、この他、その可能性があるものとして、小破片のため図化できなかつた器種・時期不明の丹塗り磨研の土器片が出土していることも付記しておく。

本遺跡で出土した「刻目突帯文土器群」は、北部九州では「稲作農耕」の存在を語るものとして周知の「夜臼式土器」と併行するものであり、当地のような山間部における縄文時代から弥生時代に移行する時期の文化・生業のあり方やその変化、他地域との交流といった問題を探る上で重要である。しかし、こうした問題に言及するには、刻目突帯文土器のみに照準を合わせず、他の出土土器や石器との共伴の状況、さらには、周辺地域のこれからの発掘調査や自然科学分析の成果などを、包括的に捉えて検討していく必要がある。この点、本報告は、そのための出土土器や石器の報告・分類・分析・評価といった、基礎資料提示の任を十分に果たせなかつた。ここで詳細を報告できなかつた石器類を含め、本遺跡の縄文時代の遺物の内容については、他日に補足的な報告をしたい。

最後に、A地区Ⅱ区においても縄文時代の遺物が少量出土しているが、A地区報告書では詳細について報告していないため、参考資料として第15図に掲載した。Ⅱ区出土の縄文時代の土器は、Ⅰ区のものと同様の内容であり、晩期後半の精製浅鉢(154～157)、粗製浅鉢(158)、無刻目突帯文深鉢(160・161)、晩期末の刻目突帯文深鉢(162～164)が出土している。165は、突帯文か弥生土器か判別できなかつたものである。166は、A地区報告時には時期不明で掲載しなかつたもので、撻描状文様のある弥生時代後期の粗製壺頸部である。

参考文献

- 「上智生B遺跡」『吾生台地と周辺の遺跡 XI』大分県竹田市教育委員会 1986年
 「吾平原第2遺跡・宮ノ前第2遺跡・城ノ平遺跡」『国道218号線高千穂バイパス建設関係発掘調査報告書』宮崎県教育委員会 1993年
 「黒土遺跡」『都城市文化財調査報告書 第28集』宮崎県都城市教育委員会 1994年
 「貫川遺跡10」『北九州市埋蔵文化財調査報告書 第170集』北九州市教育文化事業団 1995年
 泉拓良、山崎純男「凸帯文系土器様式」『縄文土器大観』第4巻 小学館 1991年
 田崎博之「夜臼式土器から板付式土器へ」『牟田裕二君追悼論集』牟田裕二君追悼論集刊行会 1994年
 堂込秀人「南九州縄文晩期土器の再検討」『鹿児島考古』第31号 鹿児島県考古学会 1997年
 山本信夫「北部九州の7～9世紀中頃の土器」古代の土器研究会 第1回シンポジウム資料 1992年 ほか



第15图 神殿遺跡A地区出土遺物 (参考資料)

胎土の特徴について

個々の土器の胎土の特徴は欄内に記しているが、類似する胎土ごとまとめで分類できるものは、下記のように略称を用いている。また、各分類ごとの特徴は、表中の都出るのはそれに近い遺物番号の欄に略称をゴシック体で記し、〔 〕内に詳細を説明している。〔 〕内の記載は、分類したもので、しないものにかかわらず、個々の土器胎土の特征事項である。

〔胎土の各分類の略称〕

- 精良 ③、④-1、④-2、④-3、⑤、⑥、⑦、⑧
やや粗質 a、a'、b

粗質 A、A'、B

※この他、「やや精良」もあるが、区分は不可。

鉱物粒とは

胎土の記載の中で、「鉱物粒」とあるのは、特に限定していない限り、「無色透明の鉱物粒（石英であろう）」と「黒色で光沢ある鉱物粒」が混在している状態を指す。後者の黒色鉱物粒については、塊状と柱状のものがあるが、輝石または角閃石とみられ、柱状粒には角閃石の可能性が高い。塊状の粒には、一部、黒曜石に近似するものもある。

第2表 神阪遺跡B地区土器観察表(1)

押図番号	遺物番号	出土位置 層位	種別	器種	調整・文様の特徴		色調		胎土の特徴	備考
					外 面	内 面	外 面	内 面		
5	1	I区 包含層	縄文土器	浅鉢	よこミガキ	よこミガキ	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	精良④	胎土に、磨滅でこくわずかな 黒色の粗粒が散在しているが、 5μm以下の粗粒は少ない。
5	2	I区 包含層	縄文土器	浅鉢	ミガキ	ミガキ 凹線	にぶい黄褐色	灰	精良④	精良④、磨滅0.5mmの粗粒が 散在しているが、5μm以下の粗粒は 少ない。
5	3	I区 包含層	縄文土器	浅鉢	口縁：よこミガキ 胴部：よこミガキ	口縁：平(凹) 凹線 胴部：よこミガキ	褐灰	褐灰	精良⑤	胎土に、1mm以下(0.3-0.6mm) 程度の中等サイズの粗粒が、若 くは少ない。
5	4	I区 包含層	縄文土器	浅鉢	よこミガキ 口縁：沈線	よこミガキ	にぶい赤褐色	にぶい黄褐色	精良④	
5	5	I区 包含層	縄文土器	浅鉢	ミガキ 口縁：へうにる魚の形	ミガキ	褐	にぶい黄褐色	精良⑤	⑤+15-20μmの粗い石片、少)
5	6	I区 包含層	縄文土器	浅鉢	よこミガキ (表面黒化)	よこミガキ 口縁：凹線	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	精良④	
5	7	I区 包含層	縄文土器	浅鉢	口縁：磨滅よこミガキ 胴部：沈線、凹線	よこミガキ 胴部：磨滅よこミガキ	にぶい赤褐色	にぶい黄褐色	精良④-1	④より粗粒が少なく、0.2- 0.4mmの白色粗粒を多く含む。
5	8	I区 包含層	縄文土器	浅鉢	よこミガキ 口縁：沈い沈線	よこミガキ	灰黄褐色	灰黄褐色	精良④-1	
5	9	I区 包含層	縄文土器	浅鉢	よこミガキ 口縁：沈線	よこミガキ	黒褐色 灰黄褐色	黒褐色 灰黄褐色	精良④-2	④より粗粒が少く、
5	10	I区 包含層	縄文土器	浅鉢	よこミガキ 沈線	よこミガキ	褐灰	褐灰	精良④-1	外側に磨滅は少ないが、 凹線は認められる。 (工痕)あり。
5	11	I区 包含層	縄文土器	浅鉢	丁寧なよこミガキ 口縁：凹線	丁寧なよこミガキ 口縁：磨滅の境界沈線	にぶい黄褐色	灰黄褐色	精良④	
5	12	I区 包含層	縄文土器	浅鉢	よこミガキ ヒレ状突起	よこミガキ ヒレ状突起、凹線文	にぶい黄褐色	褐	精良⑤	穿孔の一部が観察 される。
5	13	I区 包含層	縄文土器	浅鉢	よこミガキ 胴部：上端および 下縁	よこミガキ、磨滅り 胴部：上端：沈線	にぶい黄褐色 褐灰	褐灰 赤	精良④-2	磨滅部、内面凹部に 赤色顔料残存
5	14	I区 包含層	縄文土器	浅鉢	よこミガキ 丁寧なナテ 丹塗	丁寧なナテ 部分的に刺線	にぶい黄褐色 明赤褐色	褐灰	やや精良	磨滅部、明赤褐色の粗粒が 散在しているが、5μm以下の粗粒は 少ない。
5	15	I区 包含層	縄文土器	浅鉢	よこミガキ	よこミガキ	黒褐色	黒褐色	精良④	精良④+0.5-1.5mmの粗い粗 粒が1-2mm程度の粗い石片
5	16	I区 包含層	縄文土器	浅鉢	よこミガキ	よこミガキ 内面凹線部：凹線	にぶい黄褐色	褐灰	精良④	
5	17	I区 包含層	縄文土器	浅鉢	よこミガキ	よこミガキ 新めミガキ	黒褐色	褐灰	精良④-3	⑤+1mm程度の粗い粗粒、 石片
5	18	I区 包含層	縄文土器	浅鉢	胴部：よこミガキ 胴部：よこミガキ	胴部：よこミガキ 胴部：丁寧なナテ	暗赤褐色	にぶい赤褐色	精良④	磨滅部、磨滅粗粒が散在する が、5μm以下の粗粒は少ない。 内面凹線部に、黄褐色の粗粒が 散在しているが、5μm以下の粗粒は 少ない。
5	19	I区 包含層	縄文土器	浅鉢	ナテ 指押さえ	ナテ 指押さえ	暗褐色	褐	やや粗質 a	胎土に、磨滅粗粒が散在する が、5μm以下の粗粒は少ない。 胎土中に、0.2-0.4mm程度の粗 粒が散在しているが、5μm以下の粗 粒は少ない。
5	20	I区 包含層	縄文土器	浅鉢	ナテ 指押さえ	ナテ 指押さえ	にぶい黄褐色	にぶい赤褐色	やや精良	胎土に、磨滅粗粒が散在する が、5μm以下の粗粒は少ない。 胎土中に、0.2-0.4mm程度の粗 粒が散在しているが、5μm以下の粗 粒は少ない。
6	21	I区 包含層	縄文土器	浅鉢	ナテ 指押さえ	ナテ 指押さえ	にぶい赤褐色	にぶい赤褐色	精良⑦	
6	22	I区 包含層	縄文土器	浅鉢	よこミガキ ヒレ状突起	よこミガキ ヒレ状突起	にぶい赤褐色	黒褐色	精良⑦	内面のみ炭素吸着
6	23	I区 包含層	縄文土器	浅鉢	口縁部：丁寧なナテ 上縁：磨滅の境界	よこミガキ	褐	にぶい黄褐色	精良④	
6	24	I区 包含層	縄文土器	浅鉢	よこミガキ 沈線	よこミガキ	にぶい赤褐色	暗褐色	精良⑦	
6	25	I区 包含層	縄文土器	浅鉢	沈線	丁寧なナテ	にぶい赤褐色	にぶい赤褐色	精良⑤	胎土に、磨滅粗粒が散在する が、5μm以下の粗粒は少ない。 胎土中に、0.2-0.4mm程度の粗 粒が散在しているが、5μm以下の粗 粒は少ない。
6	26	I区 包含層	縄文土器	浅鉢	口縁部：よこミガキ、沈線 上縁：磨滅の境界	よこミガキ	明褐色	明赤褐色	やや精良	胎土に、磨滅粗粒が散在する が、5μm以下の粗粒は少ない。 胎土中に、0.2-0.4mm程度の粗 粒が散在しているが、5μm以下の粗 粒は少ない。
6	27	I区 包含層	縄文土器	浅鉢	ミガキ	ミガキ	にぶい黄褐色	黒褐色	精良④-1	内面等に炭素吸着
6	28	I区 包含層	縄文土器	浅鉢	ナテの上、部分的 によこミガキ	ミガキ	褐灰	にぶい黄褐色	粗質A'	胎土に、磨滅粗粒が散在する が、5μm以下の粗粒は少ない。 胎土中に、0.2-0.4mm程度の粗 粒が散在しているが、5μm以下の粗 粒は少ない。
6	29	I区 包含層	縄文土器	浅鉢	沈線による文様	丁寧なナテ	黒褐色	にぶい黄褐色	粗質A'	破片口縁部
6	30	I区 包含層	縄文土器	浅鉢?	丁寧なナテ 5条の沈線	ナテ、よこミガキ	灰黄褐色	黄褐色	やや粗質 b	胎土に、磨滅粗粒が散在する が、5μm以下の粗粒は少ない。 胎土中に、0.2-0.4mm程度の粗 粒が散在しているが、5μm以下の粗 粒は少ない。

第3表 神殿遺跡B地区出土土器観察表(2)

探洞 番号	遺物 番号	出土位置 層位	種別	器種	調整・文様の特徴		色 調		胎土の特徴	備 考
					外 面	内 面	外 面	内 面		
6	31	I区 包含層	縄文土器	浅鉢	よこナテ 3条の沈線	ナテ	明褐	褐	やや粗質 a	
6	32	I区 包含層	縄文土器	浅鉢	ナテ 3条の沈線	ナテ	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	粗質 A (器片やせり)	
6	33	I区 包含層	縄文土器	浅鉢	よこナテ、下半: 表面のよこナテ、縁の沈線	よこミガキ	黒褐 灰褐	にぶい褐	粗質 A*	
6	34	I区 包含層	縄文土器	浅鉢	よこナテ 3条の沈線	ナテ	にぶい褐	にぶい褐	粗質 A (15-18mmの黒い磁鉄粒と、1-3mmの白- 赤色、黒色の磁鉄粒を多く含む。胎土は 黄褐色の粘土質で、黒土は赤褐色を呈する。)	
6	35	SA1	縄文土器	浅鉢	よこナテ、よこ赤痕 口唇部:よこナテ	よこ・斜め赤痕の 上をよこナテ	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	粗質 A*	外面スス付着
6	36	I区 包含層	縄文土器	浅鉢	に斜め打付、上縁に 0.1cmほど、斜打	よこミガキ、屈曲 部:深い指押さえ	にぶい赤褐 にぶい黄褐色	にぶい褐 灰褐	やや粗質 d (aに比べて、焼成温度が12-15 %低い。胎土は1-5mmの白赤い 黄褐色の粘土質で、黒土は赤褐色を呈する。)	
6	37	I区 包含層	縄文土器	浅鉢?	ナテ	無いナテ	にぶい赤褐	にぶい赤褐	やや粗質 b	
6	38	I区 包含層	縄文土器	深鉢?	よこ・斜め赤痕 の上をよこナテ	ナテ	にぶい褐	にぶい褐	粗質 A (器片や中心、黒 褐色の磁鉄粒を多く含む。)	
6	39	I区 包含層	縄文土器	深鉢?	粗いよこナテ	ナテ	にぶい黄褐	にぶい褐	粗質 A	内面灰化跡顯著しい
6	40	I区 包含層	縄文土器	深鉢?	よこナテ 沈線による文様	丁寧なよこナテ (下半は、表面風化)	にぶい黄褐	にぶい黄褐色	粗質 A' (粗質 Aより器片ごく少)	
6	41	I区 包含層	縄文土器	鉢	胴部: 肩股赤痕 底部: 縦線痕	よこナテ	明赤褐	にぶい褐	粗質 B	底部ではなく、胴部 肩部の可能性も有る。
6	42	I区 包含層	縄文土器	鉢	縦線痕、縦線痕の 上を一部ミガキ	丁寧なナテ	にぶい褐	にぶい黄褐色	粗質 B (器片と近い、胴部、肩の赤褐色が少い。胎 土は比較的粘土質で、黒土は赤褐色を呈する。)	
6	43	I区 包含層	縄文土器	鉢	赤痕の上をナテ 底部: 縦線痕	工具ナテ	にぶい赤褐 にぶい褐	にぶい褐	粗質 B	
7	44	I区 包含層	縄文土器	深鉢	よこ赤痕 口唇部:よこナテ	よこ赤痕	明赤褐	にぶい赤褐	やや粗質 b	外面、実物後の磁粒粘 着部分有り。写し有り。
7	45	I区 包含層	縄文土器	深鉢	口唇・実部:よこナテ 実部下:よこ赤痕	ナテ? (表面風化)	にぶい橙	にぶい黄褐色	粗質 A (器片やせり)	
7	46	I区 包含層	縄文土器	深鉢	よこ赤痕、貼付突 帯(実部上部)	ナテ? (表面風化)	にぶい褐 黒褐	にぶい黄褐	粗質 A	
7	47	I区 包含層	縄文土器	深鉢	ナテ (表面風化) 貼付突帯	ナテ	にぶい褐	橙	粗質 A	
7	48	I区 包含層	縄文土器	深鉢	丁寧なナテ	ナテ	にぶい赤褐 にぶい黄褐色	黒	粗質 B	内面灰化跡付着
7	49	I区 包含層	縄文土器	深鉢 底部	斜め赤痕 ナテ	ナテ	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	粗質 A	底部、風化・剥離の 為観察不可
7	50	I区 包含層	縄文土器	深鉢	よこナテ 貼付突帯	よこナテ	にぶい褐	にぶい褐	やや粗質 b	
7	51	I区 包含層	縄文土器	深鉢	よこナテ 貼付突帯	よこナテ	にぶい橙 にぶい赤褐	にぶい赤褐	やや粗質 a	
7	52	I区 包含層	縄文土器	深鉢	貼付突帯、実部下部: 工具による押さえ	よこナテ	にぶい褐	にぶい褐	粗質 A	
7	53	I区 包含層	縄文土器	深鉢?	よこ赤痕の上をナテ 貼付突帯(実部上部)	よこ赤痕の上を 一部ナテ	橙 にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	粗質 A (中層部の胎土)は12-15mm の粗粒を多く含む。)	
7	54	I区 包含層	縄文土器	深鉢	別み目突帯、よこ 赤痕の上をナテ	よこ赤痕の上を ナテ	にぶい赤褐	にぶい褐	やや粗質 a (焼しまりあり)	内面調色は、 深褐色
7	55	I区 包含層	縄文土器	浅鉢?	に斜め打付、貼付 突帯、口唇部は貼付?	よこナテ	暗灰黄	にぶい黄褐色	やや粗質 b	
7	56	I区 包含層	縄文土器	浅鉢	に斜め打付、下半: 貼付突帯(実部上部)	よこナテ、口唇 部部:別み目か?	にぶい黄褐色	橙	粗質 A (中層部の胎土)・胴部-3m 前後に10%程度の赤褐色が 認められる。)	
7	57	I区 包含層	縄文土器	浅鉢?	胴部、縁部:縦線痕、 貼付、口唇部	ナテ	にぶい褐	にぶい黄褐色	やや粗質 a (焼しまりやせり)	
7	58	I区 包含層	縄文土器	深鉢	別み目突帯 よこナテ	ナテ	明赤褐	明赤褐	やや粗質 a (焼しまりあり)	内面灰化跡 顕著有り
7	59	I区 包含層	縄文土器	深鉢	よこ赤痕 屈曲部:別み目	よこ赤痕 屈曲部:指押さえ	にぶい赤褐	にぶい赤褐	やや粗質 a (焼しまりやせり)	
7	60	I区 包含層	縄文土器	深鉢	よこ赤痕 屈曲部:別み目	ナテ	明赤褐	にぶい橙	やや粗質 a (焼しまりや せり)	
7	61	I区 包含層	縄文土器	深鉢	ナテ 口唇上部:連続刺突文	ナテ	灰褐	灰褐	やや粗質 b	62と同一個体か?
7	62	I区 包含層	縄文土器	深鉢	上半:よこナテ 下半:粗いよこナテ 屈曲部:連続刺突文	粗いナテ	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	やや粗質 b	61と同一個体か?
7	63	I区 包含層	縄文土器	深鉢	よこナテ(ハケ痕)ナテ 口唇部:別み目(実部 上部)実部:よこ赤痕	よこナテ(ハケ痕)ナテ	明黄褐	明黄褐	粗質 A (中層部の胎土)は12-15mm の粗粒を多く含む。3cm 以上の赤褐色を呈する。)	

第4表 神殿遺跡B地区区出土土器観察表(3)

採出 番号	遺物 番号	出土位置 層位	種別	器種	調整・文様の特徴		色 調		胎土の特徴	備 考
					外 面	内 面	外 面	内 面		
7	64	I 区 I 包含層	縄文土器	深鉢	よこ糸織の上をナナ 口唇部：刻み突帯	よこ糸織 口唇部：ナナ	橙	橙	(中程度良な粘土)・0.4~1.2 mmの粗砂粒。丸気ある砂粒	
7	65	I 区 I 包含層	縄文土器	鉢?	ナナ ナナ よこ糸織 口唇部：刻み突帯	ナナ	橙	橙	(中程度良な粘土)・0.2~1.0mm の丸気ある砂粒。以下に2mmの粗 砂粒中・2.0mmの粗砂粒ごく少	外内：丹塗り
7	66	I 区 I 包含層	縄文土器	深鉢	よこ糸織 口唇部：刻み突帯	よこ糸織	橙	橙	やや粗質 a	
7	67	I 区 I 包含層	縄文土器	深鉢	よこナナ 口唇部：刻み突帯	ナナ	橙	橙	粗質 A (粘土片)	
7	68	I 区 I 包含層	縄文土器	壺	よこナナ 口唇部：一條の凹線 上をの下の刻み突帯	よこナナ 口唇部：指押さえ	にぶい赤褐 濁灰	橙	やや粗質 a (粘土片) 細砂粒中・0.5~1mm の丸気ある砂粒中多。25 ~30mmの粗砂粒。	胎内に黄色い粉状物 。底辺に厚約1cm
7	69	I 区 I 包含層	縄文土器	深鉢	ナナ ナナ ナナ ナナ ナナ	ナナ ナナ ナナ ナナ ナナ	洗黄	洗黄		
7	70	I 区 I 包含層	縄文土器	壺?	ナナ 刻み突帯	ナナ	にぶい橙	にぶい黄	やや粗質 a	壺部か?
7	71	I 区 I 包含層	縄文土器	鉢	ナナ ナナ ナナ ナナ ナナ	ナナ ナナ ナナ ナナ ナナ	にぶい赤褐 明赤褐	明赤褐	やや粗質 b	
8	72	I 区 I 包含層	縄文土器	不明	丁軍なナナ X字状貼付突帯	よこ・やや粗いナナ	にぶい橙	にぶい橙 暗灰黄	精良⑤	内面に粘土よりも砂粒。73 と同一個体か?
8	73	I 区 I 包含層	縄文土器	不明	丁軍なナナ 貼付突帯	ナナ	にぶい橙	にぶい黄	精良⑤	72と同一個体か?
8	74	I 区 I 包含層	縄文土器	浅鉢?	よこナナ 口唇部：刻み突帯	工具によるよこナナ 下：不明(表面風化)	灰黄	灰黄	精良④・0.5~1mmの丸 気ある砂粒中。	
8	75	I 区 I 包含層	縄文土器	鉢?	丁軍なナナ 貼付突帯	ナナ	にぶい黄	オリーブ黄	やや精良 粗砂粒中多(赤・中程度良な粘土)・0.5~1mm の丸気ある砂粒中多。	
8	76	I 区 I 包含層	縄文土器	壺?	ミガキ	丁軍なナナ	にぶい赤褐	にぶい赤褐	精良⑤	
8	77	I 区 I 包含層	縄文土器	台付 浅鉢	粗いナナ 口唇部：刻み突帯	ナナ	にぶい黄	にぶい黄	やや精良 粘土片中多 0.5~1mmの丸気ある砂粒中多。 胎土の工具痕あり。	胎土の粗砂粒中多。胎土の 粗砂粒中多。胎土の粗砂粒中多。 胎土の粗砂粒中多。
8	78	I 区 I 包含層	縄文土器	不明	ナナ 口唇部：刻み突帯	ナナ	にぶい黄褐	にぶい黄	やや精良 (粘土片) 粗砂粒中多。	上下左右方向不明
8	79	I 区 I 包含層	縄文土器	不明	丁軍なナナ 浅鉢文	ナナ(一部工具痕)	にぶい黄褐	にぶい黄	やや精良 (5~1mm) 粗砂粒 中多。胎土の粗砂粒中多。	胎土の粗砂粒中多。胎土の 粗砂粒中多。胎土の粗砂粒中多。
8	80	I 区 I 包含層	縄文土器	円板	ナナ	ナナ	にぶい黄褐	黄灰	やや粗質 a	土器片用のもので
11	81	SA 1	弥生土器	甕	平行線タタキ	たて・斜めハケ 指押さえ	にぶい黄褐	にぶい黄褐	(中程度良な粘土)・1~2.5 mmの丸気ある砂粒中多。	外周上縁および内面 下半ス付着
11	82	SA 1	弥生土器	甕	平行線タタキ	上方向の強いナナ 指押さえ	にぶい黄褐 黒褐	暗灰黄	(中程度良な粘土)・1~2mmの丸 気ある砂粒中多。胎土の粗砂粒 中多。	外周ス付着
11	83	SA 1	弥生土器	壺	ハケ	胎土の粗砂粒中多。胎土の 粗砂粒中多。胎土の粗砂粒中多。	黒褐	にぶい黄褐	中程度良な粘土片中多。0.5~ 1mmの砂粒中多。	外周ス付着
11	84	SA 1	弥生土器	壺	上縁：よこナナ たて・斜めハケ	ナナ(刻線ケ所多)	にぶい黄褐	にぶい黄褐	胎土の粗砂粒中多。胎土の粗砂 粒中多。胎土の粗砂粒中多。	
11	85	SA 1	弥生土器	壺	斜めハケ (細の小さいハケ)	指押さえ ナナ	浅黄褐	浅黄褐	(精良粘土)・1~2mmの丸 気ある砂粒中多。4~5mmの粗砂 粒中多。	
11	86	SA 1	弥生土器	不明	粗いナナ	ナナ? (表面風化)	にぶい黄褐	にぶい黄褐 濁灰	粗質 A (粘土片) 粗砂粒中多。	
11	87	SA 1	弥生土器	甕	よこナナ	ナナ	黄灰	橙	粗質 A (泥入物 若干)	外周ス付着
11	88	SA 1 SA 2	弥生土器	甕	口唇部：よこナナ 胎土の粗砂粒中多。胎土の粗砂 粒中多。胎土の粗砂粒中多。	ナナ。胎土の粗砂粒中多。胎土の粗 砂粒中多。胎土の粗砂粒中多。	にぶい黄	にぶい黄	粗質 A (粘土片) 粗砂粒中多。	胎土の粗砂粒中多。胎土の粗砂 粒中多。胎土の粗砂粒中多。
11	89	SA 1	弥生土器	甕	ナナ	ナナ	にぶい黄	黄灰	粗質 A (粘土片) 粗砂粒中多。	外周：ス付着 内周：全体に灰状物付着
11	90	SC 5	弥生土器	甕?	ナナ(刻線ケ所多) 胎土の粗砂粒中多。胎土の粗砂 粒中多。胎土の粗砂粒中多。	ヘラ状工具による 粗いよこナナ	にぶい赤褐	にぶい黄	粗質 B	外周：ス付着 胎土の粗砂粒中多。
11	91	SC 1	弥生土器	甕	よこ工具ナナ(ハ ケ状)の上をナナ	ナナ 胎土の粗砂粒中多。胎土の粗砂 粒中多。胎土の粗砂粒中多。	洗黄	洗黄	(中程度良な粘土)・粗砂粒 中多。胎土の粗砂粒中多。	
11	92	I 区 III 包含層	弥生土器?	壺	頸部被状文 頸部：よこナナ	胎土の粗砂粒中多。胎土の粗砂 粒中多。胎土の粗砂粒中多。	橙	橙	(精良粘土)・粗砂粒 中多。胎土の粗砂粒中多。	
11	93	I 区 III 包含層	弥生土器	壺	ナナ	胎土の粗砂粒中多。胎土の粗砂 粒中多。胎土の粗砂粒中多。	にぶい黄褐	浅黄	(中程度良な粘土)・1~3mm の丸気ある砂粒	外周：スわずか に付着
11	94	I 区 II 層	弥生土器	壺?	口唇部：刻み よこナナ	丁軍なナナ	にぶい黄褐	にぶい黄褐	(中程度良な粘土)・0.2 ~1.5mmの粗砂粒中多。	
13	99	I 区 I 包含層	土師器	環・蓋	よこミガキ	よこミガキ	橙	橙	(精良粘土)・0.5~1.5mm の砂粒ごく少	外内両面、丹塗り
13	100	I 区 II 層	土師器	環・蓋	ヘラケズリ	ナナ	にぶい黄	橙	(精良粘土)・1~1.5mm の砂粒	

第5表 神殿遺跡B地区出土土器観察表(4)

採回 番号	遺物 番号	出土位置 層位	種別	器種	調整・文様の特徴		色調		胎土の特徴	備考
					外面	内面	外面	内面		
13	101	I 区	土師器	高台付 杯	ナテ	ナテ	灰白	灰白	(精良胎土)・焼成~ 0.5mm大の砂粒	
13	102	I 区 包含層	須恵器	坏・蓋	回転ナテ	回転ナテ	オリーブ黒	灰	精良	外面：内面口縁部 自然釉
13	103	I 区 包含層	須恵器	坏・身	体部下半：ケズリ 回転ナテ	回転ナテ	灰	灰白	精良	
13	104	I 区 II 区	須恵器	甕	よこナテ 縹緋波状文	よこナテ	灰白	灰白	精良	内面：自然釉 (輪縁、暗オリーブ)
13	105	I 区 I 区 I 区 I 区 I 区 I 区	須恵器	坏・蓋	回転ケズリ 回転ナテ つまみね(ナテ)	回転ナテ	灰白 灰	灰黄	精良	外面：自然釉 (一部、縹緋波の縹 緋色あり)
13	106	I 区 包含層	須恵器	坏・蓋	ナテ	よこナテ 口縁：沈脚	黄灰	暗灰黄	精良	
13	107	I 区 包含層	須恵器	坏・身	よこナテ	回転ナテ	暗灰黄	黄灰	精良	
13	108	I 区 II 区	須恵器	坏・身	よこナテ 体部下半：ケズリ の上をよこナテ	回転ナテの上をナテ	黄灰	暗灰黄	精良	外面：口縁部一部 自然釉
13	109	I 区 II 区	須恵器	坏・身	回転ナテ 体部下部ケズリ	回転ナテ	にぶい黄褐	にぶい黄褐	精良	
13	110	I 区 II 区	須恵器	高台付 坏	よこナテ 高台付部：へら切り	ナテ	灰黄	灰黄	精良	
13	111	I 区 包含層	須恵器	高台付 坏	付：厚型ナテ 付：薄型ナテ 付：厚型ナテ 付：薄型ナテ	よこナテ	灰	灰	精良	
13	112	I 区 II 区	須恵器	高台付 坏	ナテ	よこナテ ナテ	灰黄	灰黄	精良	高台部剥離
13	113	I 区 II 区	須恵器	小型甕 (甕)?	上半：回転ナテ 下半：平行タタキ	上半：よこナテ 下半：同心円当て具痕	灰黄	黄灰	精良	
13	114	I 区 包含層	須恵器	甕?	よこナテ	よこナテ	灰	灰	精良	外面形部以下に自然 釉。遺物部以下自然 釉なし
13	115	I 区 II 区	須恵器	甕?	回転ナテ	回転ナテ	暗灰黄	灰黄	精良	元底面の底面の可成り も有り
13	116	I 区 II 区	須恵器	甕	よこナテ	よこナテ	暗灰黄	暗灰黄	精良	外面：自然釉 遺物部以下自然 釉なし
13	117	I 区 II 区	須恵器	甕	回転ナテ? (全面に 自然釉) 沈脚	ナテ	にぶい黄褐	にぶい黄褐	精良	外面：茶色の自然釉
13	118	I 区 II 区	須恵器	甕	回転ナテ	回転ナテ	灰 (やや黒色味)	灰	精良	
13	119	I 区 II 区	須恵器	甕	よこナテ 凹縁、突帯	よこナテ	灰黄	灰黄	精良	
13	120	I 区 II 区	須恵器	甕	よこナテ 凹縁、突帯	よこナテ	灰黄	灰	精良	
13	121	I 区 II 区	須恵器	甕	よこナテ	よこナテ	灰	黄灰	精良	
13	122	I 区 II 区	須恵器	甕	平行タタキ	同心円当て具痕	灰	灰	精良	
13	123	I 区 II 区	須恵器	甕	平行タタキ	同心円当て具痕	灰	灰	精良	
13	124	I 区 II 区	須恵器	甕	甕部縁：よこハケ 平行タタキ	甕部縁：よこナテ 同心円当て具痕	灰	灰	精良	
13	125	I 区 II 区	須恵器	甕	格子目タタキの 後一部ナテ	同心円当て具痕 の後一部ナテ	灰	灰	精良	
13	126	I 区 II 区	須恵器	甕	平行タタキの後 ハケナテ	同心円当て具痕	灰	灰	精良	
13	127	I 区 II 区	須恵器	甕	平行タタキ	凹凸の無い同心円状 の当て具痕、ナテ	黄灰	にぶい黄	精良	焼きしまり不良
13	128	I 区 I 区 I 区 I 区 I 区 I 区	須恵器	甕	平行タタキの上にハケ	同心円の当て具痕	灰	灰	精良	
13	129	I 区 II 区	須恵器	甕	格子目タタキの上を ナテ	同心円の当て具痕 の上をナテ	灰	灰	精良	外面に灰火物様の黒 色物付着
13	130	I 区 II 区	須恵器	甕	平行タタキの上を一部 ナテ	ナテ 円形の当て具痕?	灰黄褐	灰黄褐	精良	
13	131	I 区 II 区	須恵器	甕	平行タタキの上 から一部ナテ	ナテ 円形の当て具痕?の 上をナテ	褐灰	褐灰	精良	
13	132	I 区 I 区 I 区 I 区 I 区 I 区	須恵器	甕	平行タタキの上 にハケ	円形?の当て具 痕の上をナテ	褐灰	褐灰	精良	
13	133	I 区 II 区	須恵器	甕	格子目タタキ	強いナテ	黄灰	黄灰	精良	

第6表 神殿遺跡B地区出土土器観察表(5)

押印 番号	遺物 番号	出土位置 層位	種別	器種	調整・文様の特徴		色 調		胎土の特徴	備 考
					外 面	内 面	外 面	内 面		
13	134	I 区 III 区	須恵器	甕	頸部:よこナテ 格子目タタキ	ナテ、ヘラ状工具による 細いナテ	灰	灰	精良	
14	135	I 区 包含層	無釉陶器 (須恵器?)	甕	ナテの柄、細いナテ に磨製破文	同心円の呉瓶 の上をよこナテ	暗灰黄	暗灰黄	精良	130と同一個体
14	136	I 区 II 区	無釉陶器 (須恵器?)	甕	柄の格子目タタキの 上をナテ、念の後 上向きに磨製破文	同心円の呉瓶 の上をよこナテ	暗灰黄	暗灰黄	精良	135と同一個体
14	137	SC4	須恵質土器	鉢?	よこ、斜めナテ	よこナテの上、 たてナテ	にぶい黄 黄褐	淡黄 黄褐	精良	
14	138	I 区 II 区	土師器	布 土 器	ナテ	布目痕	灰黄 淡黄	明黄褐	精良	外側に光沢のある灰 色の付着物有り
14	142	I 区 II 区	土師器 (青磁)	碗	ヘラ描きによる 文様の上を施釉	ヘラ描きによる 文様の上を施釉	釉調:オ リーブ灰	釉調:オ リーブ灰	精良 胎土色調:灰白	輪の厚さ最大0.8mm 底厚0.5mm
14	143	I 区 II 区	土師器 (青磁)	碗	施釉(貫入)	施釉(貫入)	釉調:淡青	釉調:淡青	精良 胎土色調:灰	輪の厚さ最大0.4mm 底厚0.3mm
14	144	I 区 II 区	土師器 (青磁)	碗	磨状工具による凹凸 ナテの上を施釉	磨状工具端部による 文様の上を施釉	釉調:灰 オリーブ	釉調:灰 オリーブ	精良 胎土色調:灰	輪の厚さ最大0.3mm 底厚0.3mm
14	145	I 区 II 区	土師器 (染付)	碗	染付施釉	施釉	灰白	灰白	精良	胎土色調 (内面)オリーブ灰 底厚0.3mm
14	146	I 区 II 区	土師器 (染付)	碗	染付施釉	染付施釉	灰白	灰白	精良	肥前系
14	147	I 区 II 区	土師器 (染付)	角形鉢	施釉 (焼成不良)	染付施釉 ハマ痕有り	灰白	灰白	精良 胎土色調:黄	肥前系
14	148	I 区 II 区	土師器 (染付)	碗	染付施釉	施釉	白	白	精良	「人形年輪」類 肥前系
14	149	I 区 II 区	土師器 (染付)	碗	染付施釉	施釉	灰白	灰白	精良	肥前系
14	150	I 区 包含層	陶 器	碗	磨状工具による文様を白 土敷き、その上に施釉	施釉	オリーブ風	オリーブ風	精良 胎土色調:黄灰	原形残
14	151	I 区 II 区	土師器 (染付)	碗	染付施釉 (焼成や貫入)	施釉(焼成や や貫入)	灰白	灰白	精良	肥前系
14	152	I 区 II 区	土師器 (染付)	人形	輪の凹凸(赤・青・黄 土敷き、細粒砂混入)	指押さえ	灰白	灰白	精良	勢子、表面は滑り下し 底にも滑り下し、生焼け不 純
14	153	I 区 II 区	土師器 (染付)	レンゲ	染付施釉	染付施釉	灰白	灰白	精良	勢子、黄褐色は、滑り 下し、生焼け不純
15	154	II 区	縄文土器	浅鉢	ミガキ	ミガキ	灰黄褐	褐灰	精良⑧	
15	155	II 区 SA5	縄文土器	浅鉢	ミガキ	洗い凹線 ナテ(凹線以上) よこミガキ(凹線以下)	にぶい褐 灰褐	にぶい褐 灰褐	精良⑧	
15	156	II 区 SA6	縄文土器	浅鉢	ミガキ 洗い凹線	ミガキ 凹線	黒褐	黒	精良④	
15	157	II 区 包含層	縄文土器	浅鉢	ミガキ 穿孔	不明(表面風化)	灰黄	灰	精良⑧	焼成後穿孔
15	158	II 区 SA6	縄文土器	浅鉢	ナテ 2条の凹線	不明(表面風化)	にぶい黄褐	にぶい黄褐	粗質A	
15	159	II 区 SA4	縄文土器	壺?	ミガキ	ミガキ	にぶい褐	にぶい褐	精良⑧	
15	160	II 区 SA7	縄文土器	深鉢	よこナテ 突帯	口付付近:よこナテ 工具ナテの上をナテ	灰黄褐	褐	粗質B	
15	161	II 区 SA4	縄文土器	深鉢	よこナテ 突帯	口縁端部と 弱い指押さえ	にぶい黄褐 黒褐	にぶい黄褐 黒褐	粗質A	
15	162	II 区 包含層	縄文土器	深鉢	よこナテ 飲み自突帯 (滑り凹線)	よこハケ	黒褐 褐	褐	粗質B	胎土は、滑りによる ミガキの凹線が、胎土 中に残っており、胎土 中にミガキの凹線が 残っており、胎土 中にミガキの凹線が
15	163	II 区 SA4	縄文土器	深鉢	ナテ 刻み目突帯	よこナテ	褐	黒褐	やや粗質b	外側に付着物有り
15	164	II 区 包含層	縄文土器	深鉢	ナテ 刻み目突帯	不明(割離)	にぶい黄褐	——	粗質A	
15	165	II 区 SA7	縄文土器?	不明	磨状工具による文様 (凹線以上)	ナテ	にぶい黄褐	明黄褐	精良	(中層層位出土)・胎土 中にミガキの凹線が 残っており、胎土 中にミガキの凹線が
15	166	II 区 SA11	弥生土器	甕	ナテ 磨状工具による文様	ナテ	にぶい赤褐	にぶい赤褐	粗質A	弥生時代後期の粗質 変型甕
15	167	I 区 SA2	土師器?	小型壺	口縁下:よこナテ、 ヘラナテ 口縁下:たてハケ	よこナテ	暗赤褐	にぶい褐	精良	(中層層位出土)・胎土 中にミガキの凹線が 残っており、胎土 中にミガキの凹線が
15	168	I 区 SA2	土師器?	甕	頸部:よこナテ たてハケ	斜めハケの上を、 ヘラナテ	黒	にぶい黄褐	167と同一胎土	有留式施釉か? 外周全面にスス付着
15	169	I 区 SA2	土師器?	甕?	たて、斜めハケ	斜めハケの上一部が よこのヘラナテ	黄褐	にぶい黄褐	167と同一胎土	有留式施釉か? 外周全面にスス付着



調査開始時 南より淡路城方向を望む



調査区遠景 (北から)



B地区 SA1 (中央) 検出状況 (東から)



I区全景 (北東より)



左上：調査面検出作業

右上：T2トレンチ南部
土層堆積状況

左：T2トレンチ北部
土層堆積状況
(時期不明の掘り込み)



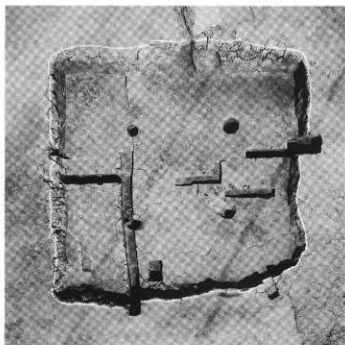


I区 全景 (上空から)

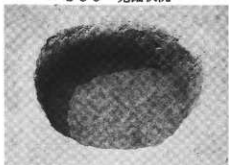
右: SC1 検出状況および
埋土土層断面

下: SA1 (上空より)

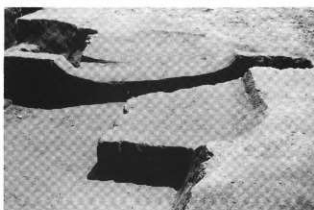
右下: SC1 完掘状況



SC3 完掘状況



SC4 完掘状況 下: 同 埋土断面





SA 1 完掘状況 (西から)



SA 1 掘り下げ作業



SA 1 東部 土器 (88ほか) 出土状況 (西南から)



SA 1 埋土堆積状況 (断面F-F'北半部)



SA 1 埋土堆積状況 (断面C-C'北半部)



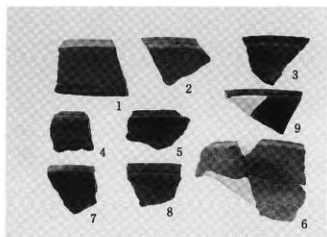
SA 1 北東部壁面周辺の土層状況 (断面F-F')



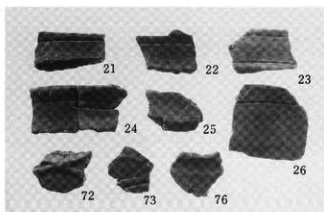
SA 1 西壁付近土層断面 (断面B-B'西端部)



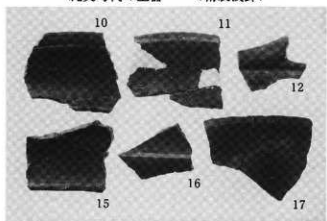
SA 1 南東部壁面周辺の土層状況 (断面C-C'南半部、北東から)



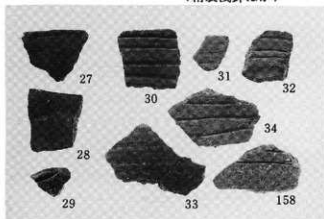
縄文時代の土器 <精製浅鉢>



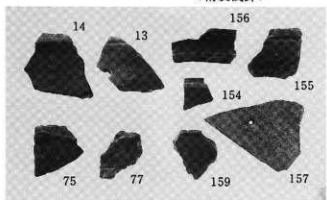
<精製浅鉢ほか>



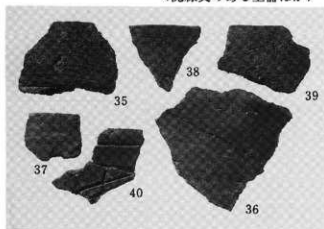
<精製浅鉢>



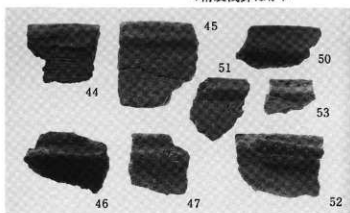
<沈線文のある土器ほか>



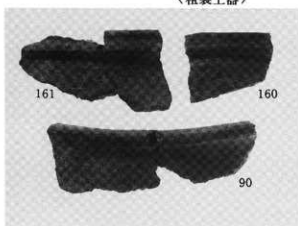
<精製浅鉢ほか>



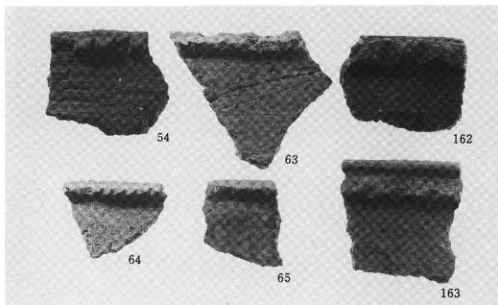
<粗製土器>



<突帯文土器>

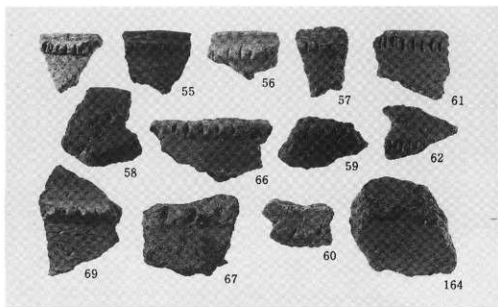


160・161<突帯文土器> 90…弥生土器?

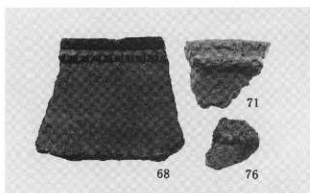


縄文時代 晩期

刻目突帯文土器
(口縁部)



刻目突帯文土器
(小型口縁部
および胴部屈曲部)



刻目突帯文土器
(甕以外の器種)



55

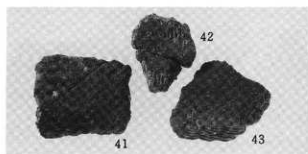


56



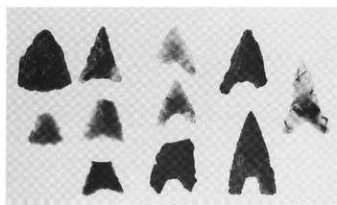
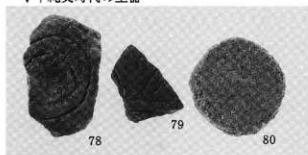
57

55～57 口唇部 刻み 拡大写真



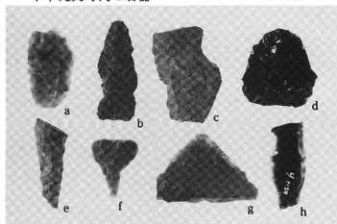
↓ 縄文時代の土器

↑ 組織痕土器

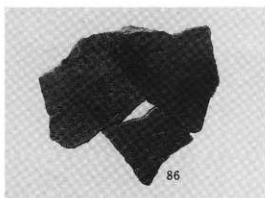


↓ 縄文時代の石器

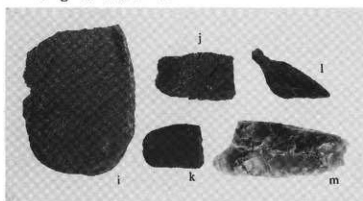
↑ 石鏃



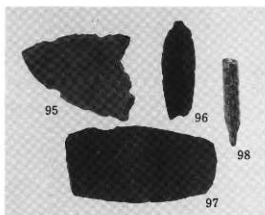
a…楔形石器? b・d…尖頭状石器 e・f…石鏃
c・g・h…スクレーパー



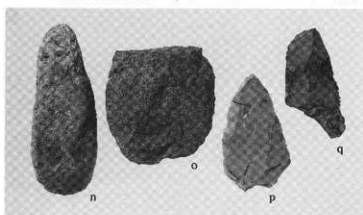
弥生時代?の土器



i・k…磨製石器未製品? j・m…スクレーパー l…石匙



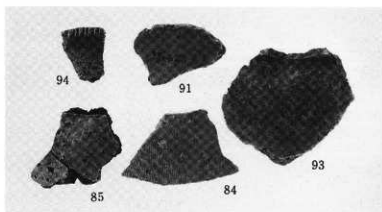
弥生時代および時期不明の石器



n…磨製石斧 o~q…偏平打製石斧



88

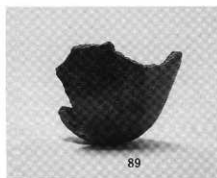


上・右 弥生時代の土器

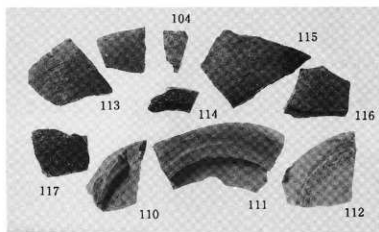


99

左・下 古墳時代以降の遺物

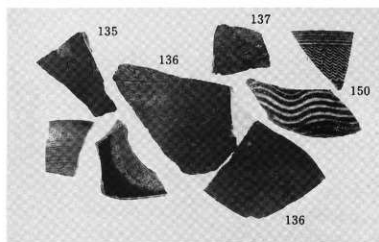


89

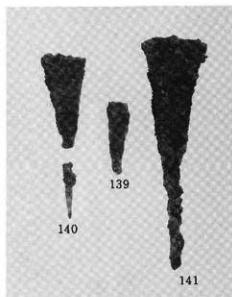


138

製塩（布痕）土器



左下 2 点は内野山窯の製品、150 およびその下は唐津焼



鉄鎌

2. 神殿遺跡C地区の調査

第1節 遺跡の立地と調査の概要

神殿遺跡C地区は、高千穂町大字三田井字神殿にし、高千穂峽を挟んだ東側、高千穂大橋（仮称）の起点部にあたる。

遺跡は、淡路城とされる標高約370mの丘陵から南東に延びた尾根筋、標高323～332m南向き斜面に立地する。丘陵先端部（南西部）は高千穂峽が形成されており、遺跡との比高差は約100mを測る。

神殿遺跡では弥生後期～古墳時代の住居跡が検出されているが、それら集落の立地についてみると、宮ノ前第2遺跡⁽¹⁾や南平第3遺跡、神殿遺跡A地区のⅠ区⁽²⁾のような丘陵と丘陵との間の南向き凹地状の斜面部につくられるもの、あるいは当遺跡やA地区Ⅱ区のような尾根筋の南向き緩斜面に形成されるものに分れる。このことは地理的環境のほかに風などの気象条件等が集落立地の大きな要因であったと考えられる。

高千穂地方のこの時期の集落の様相としては、南平第3遺跡のように住居が密な状態で発見される場合もわずかにあるものの、大部分は重複することなくつくり、瀬戸内系の高坏や壺、須玖式土器の甕、布留系の甕などの遺物の流入をみても、宮崎平野部のそれと非常に類似する面もみられる。

註

- (1) 長津宗重 他「吾平原第2遺跡 宮ノ前第2遺跡 城ノ平遺跡」『国道218号線高千穂バイパス建設関係発掘調査報告書』宮崎県教育委員会 1993
- (2) 戸高真知子 他「広木野遺跡 神殿遺跡A地区」『宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 第7集』宮崎県埋蔵文化財センター 1997

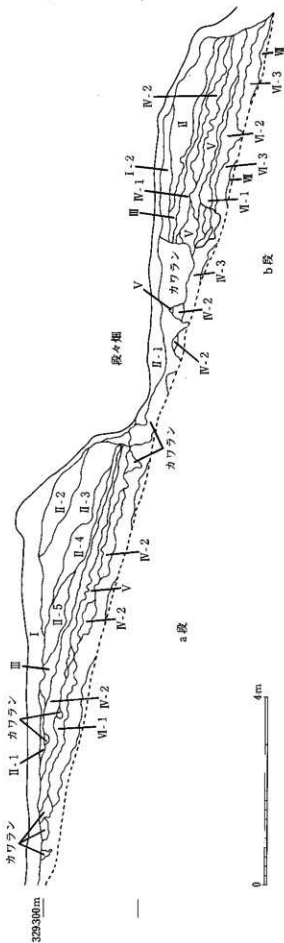
第2節 調査の経過

平成5年に神殿遺跡A・B地区の調査が実施され、緩やかとは言えない斜面部から弥生時代～奈良時代の堅穴住居跡が、中ノ原遺跡では斜面部に陥し穴状遺構が発見された。これらを受け、県文化課では、高千穂大橋（仮称）の東側起点部の工事範囲についても、何かの遺構が存在する可能性を想定し、平成7年11月に試掘調査を行った。結果、縄文土器や土師器が出土し遺跡の所在が確認され、神殿遺跡C地区とした。調査は、平成8年6月5日から平成8年11月8日まで実施した。

調査はまず、調査対象地が段々畑であることから再度重機および作業員によりトレンチを入れ、各段の土層や遺構遺物の状況の確認を行った。調査対象地は、四つの段に分かれ、北側（山側）ではⅤ層やⅥ層が表土下直に露出し旧地形を残していない。一方、各段の端部（法面）では客土および耕作土が厚く堆積し、その下部にⅢ層以下が残存していた。そこで、まず表土および客土を重機によって除去し、遺物包含層であるⅢ・Ⅳ層を作業員で掘り進め、Ⅴ層で遺構確認を行った。

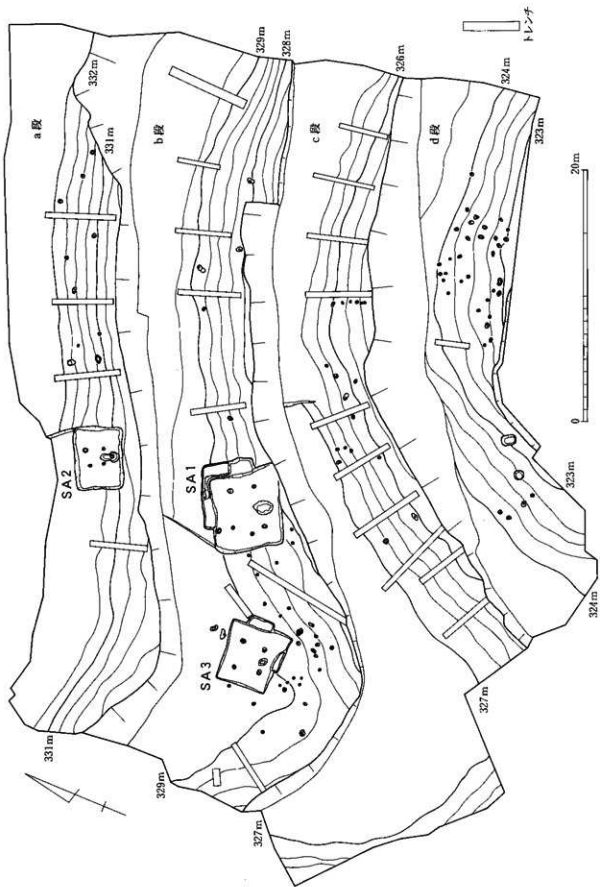
7月上旬、Ⅴ層上面でSA1を検出した。当初、遺構の輪郭から2軒の住居の切りあいと推定されたが、調査の結果、北東部を拡張した1軒の住居として認定した。また、SA1からガラス小玉1点が発見されたため、以後SA1～3の住居床面の埋土をフルイにかけたが、以後、玉類、炭化物などは検出されなかった。

Ⅴ層上面での調査終了後、客土および住居埋土より押型土器が出土していたことから、縄文早期の遺構遺物を確認するためのトレンチを数本入れたが、遺構遺物は検出されなかった。



- 第I層：礫石の層状上。
 第II層：赤土、色澤の混んで居つて分れる。
 第III層：黄褐色土JHaeI07RZD 運搬土砂層、軟質で炭化燐少量含む。
 第IV-1層：黄褐色土JHaeI07RZD やや軟質であるが、黄褐色土プロックを含む。
 第IV-2層：黄褐色土JHaeI07RZD やや軟質であるが、黄褐色土プロックを少量含む。また、黄褐色土プロックを少量含む。
 第V層：黄褐色土JHaeI07RZD やや軟質、少量の黄褐色土 (IV層) のプロックやアホヤプロックを含む。アホヤの一次浸透層か。
 第VI-1層：黄褐色土JHaeI07RZD やや軟質をもち、黄褐色土 (V層) プロックを含む。
 第VI-2層：黄褐色土JHaeI07RZD 1より軟質のある黄褐色土。にぶい黄褐色土 (IV層) プロックを含む。
 第VI-3層：黄褐色土JHaeI07RZD 2層に比べてにぶい黄褐色土 (IV層) プロックの大きさが小さく、色が分らない。
 第VII層：にぶい黄褐色土JHaeI07RZD 粘状あり。あめこまか。
 第VIII層：灰白色粘質土。

第1図 神威遺跡C地区土層断面図



第2図 神威遺跡C地区遺構分布図

調査の結果、遺構としては古墳時代前半の竪穴住居跡3軒、土坑1基、ピット、遺物は縄文時代後期から晩期の土器類、布留系土器の甕や土師器、石器として打製石鏃、打製石斧、スクレーパー、玉類、鉄鏃などが発見された。

第3節 遺跡の層序

神殿遺跡C地区の基本的な層序は、第1図のとおりである。このうち第Ⅲ層およびⅣ層が遺物包含層であるが、両者に縄文後晩期や土師器が混じることから、遺物の多くは流れ込みと考えられる。遺構検出面の第Ⅴ層は均一の層ではなく暗褐色土のブロックを部分的に含んだアカホヤの二次堆積層に想定され、神殿遺跡A地区のⅠ区の第Ⅳ層に相当する。客土やSA2の埋土中から押型文土器が出土していることから、縄文早期の遺跡の存在の可能性のあるものの、今回の調査では確認できなかった。第Ⅵ・Ⅶ層が当該期にあたるものと考えられる。一方、Ⅱ区で認められたATと推定される黄色のブロックを含んだ黒褐色土はC地区ではみられず、Ⅵ層、Ⅶ層の下が地山と考えられる灰白色粘質土となる。

第4節 遺構と遺物

遺構としては、竪穴住居跡3軒、土坑1基、ピット群を検出した。住居跡は斜面の上から二段目までに作られている。土坑はSA2の東に位置し、ピットは各段まばらに分布するが、建物については復元できなかった。

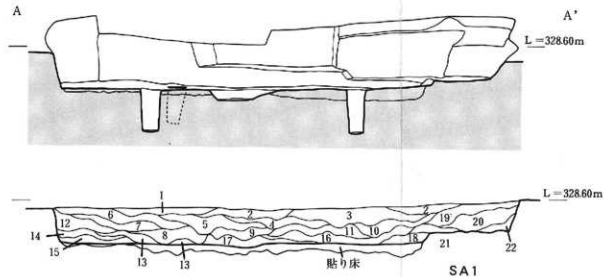
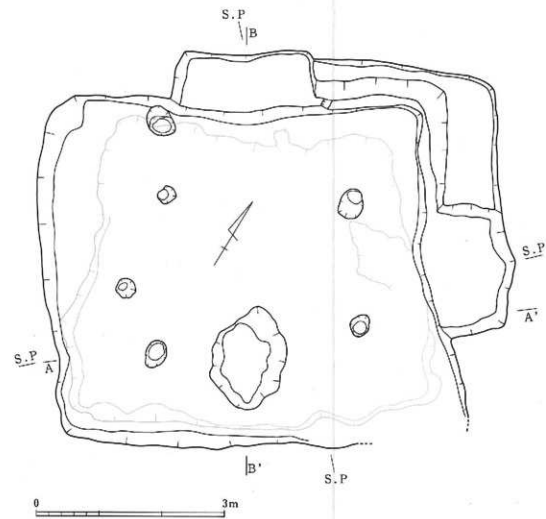
遺物は住居跡から出土した古墳時代前半の遺物の以外に、Ⅰ～Ⅳ層および住居埋土中からは、縄文土器や弥生土器、布留系の土器、石鏃、スクレーパーなどが発見されている。以下、遺構および遺構内出土遺物、遺構以外の遺物の順に述べ、住居内出土の縄文時代遺物については後でまとめて記述している。遺物の詳細は遺物観察表を参考にされたい。なお、住居跡の面積は、床面積を計測した。

SA1 (第3図)

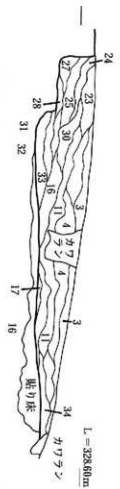
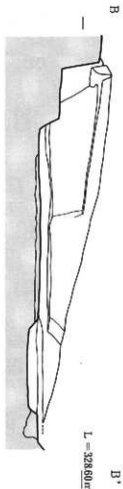
SA1は、上から二段目の中央よりやや西よりの標高約329mに位置する。住居は完掘の結果、長軸約6.8m、短軸約5.6mの方形プランを基調とし、主軸N-38°-W、面積38.36㎡を測る。北壁と東壁の中央に方形の張り出しをもち、この二つの張り出し部の上面を結ぶように鍵状に北東部が拡張されている。遺構はⅤ層で検出し、床面までの深さは、北側で0.98m、南側で0.10mを測る。

遺構の検出面での段階では、当初2軒の方形の住居の重複と考えたが、埋土の堆積や遺構状況から北東部分が張り出す1軒の住居跡と認定した。この北東部拡張部の深さは検出面から約0.2m、床面からだと約0.85mの高さとなる。拡張部の床面は東壁で幅約0.75m、北壁では約20cmと狭くなり、面積は1.9㎡。また、北壁の張り出し部は、床面で幅約2.2m、長さ約0.8m、床面からの高さ約0.75m、広さ1.66㎡。一方、東壁の張り出し部は、床面で幅約1.8m、長さ約1.1m、床面からの高さ約0.16m、広さ1.89㎡を測る。さらに、張り出し部の床面が延び、細長いテラスを呈し、拡張部と合せると、住居北側コーナー部は二段の平坦面が形成されていたことになる。

主柱穴は4本で、2柱穴間に長軸1.65m、短軸1.17m、深さ約0.13mの土坑が設けられている。土坑の埋土は軟質の黒褐色土で少量の炭化物が混入している。また、床面はⅤ層～Ⅶ層ブロックの混合土で貼床が作られている。貼床は四壁周辺以外の床面に施され、深さ約20～40cmを測る。南側には浅く凹み落込みがあり、少量の炭化物が出土したが、焼土は確認できなかった。



第3図 神殿遺跡C地区SA1遺構尖測図



- 第1層 埋設土
- 第2層 埋設土
- 第3層 埋設土
- 第4層 埋設土
- 第5層 埋設土
- 第6層 埋設土
- 第7層 埋設土
- 第8層 埋設土
- 第9層 埋設土
- 第10層 埋設土
- 第11層 埋設土
- 第12層 埋設土
- 第13層 埋設土
- 第14層 埋設土
- 第15層 埋設土
- 第16層 埋設土
- 第17層 埋設土
- 第18層 埋設土
- 第19層 埋設土
- 第20層 埋設土
- 第21層 埋設土
- 第22層 埋設土
- 第23層 埋設土
- 第24層 埋設土
- 第25層 埋設土
- 第26層 埋設土
- 第27層 埋設土
- 第28層 埋設土
- 第29層 埋設土
- 第30層 埋設土
- 第31層 埋設土
- 第32層 埋設土
- 第33層 埋設土
- 第34層 埋設土

床面および土坑から出土した炭化物の年代測定を行ったところ、BP 1760 ± 60 および BP 1760 ± 40 の測定結果を得、古墳時代初頭から前半の時期に相当する。(分析結果については南平第3遺跡の自然科学分析の中に記載されている。)

遺物 (第5図1~11)

遺物の量は他の住居跡よりも多いが、床面からは非常に少なく、小片が多い。1は壺で口縁部、胴部、底部の破片を図上復元したものである。2~4は1と同一個体と考えられ、頸部外面に推定で約5cmの高さになる鋸歯状の線刻が描かれている。5~8は壺で、5は小片であるが外面に右下がりのタタキが施される。6は小型の壺で口縁部はやや内湾気味に立ち上がる。7は小型丸底壇の系譜のもので胎土はきめ細かく、ていねいな作りである。外面胴部にタタキあるいは工具の調整痕が残る。8は胴部がやや扁球状を呈し丸底となる直口壺である。外面にスス付着。9は本遺跡唯一の高坏で、口径18.1cmを測る。坏部の屈曲はやや不明瞭となり口縁部は大きく外方に開く。脚部の形態は不明だが、短く裾部が外方に開くと推定される。坏部と脚部の接合は、脚部挿入する技法を用いている。外面は細かなヘラミガキ、内面は横ナデ調整。10・11は布留系壺の胴部片で、外面は細かなハケメ、外面がヘラケズリ。石器(第12図)としては、敲石(14)、砥石(16)、磨石(17)が出土している。14は敲石だが、両面に磨痕がみられる。17の砥石は全面を使用しており、中央付近はかなり薄くなっている。そのほか埋土中からガラス小玉1点が見つかった。床面の土をすべてフルイにかけたが、この1点のみであった。

SA2 (第4図)

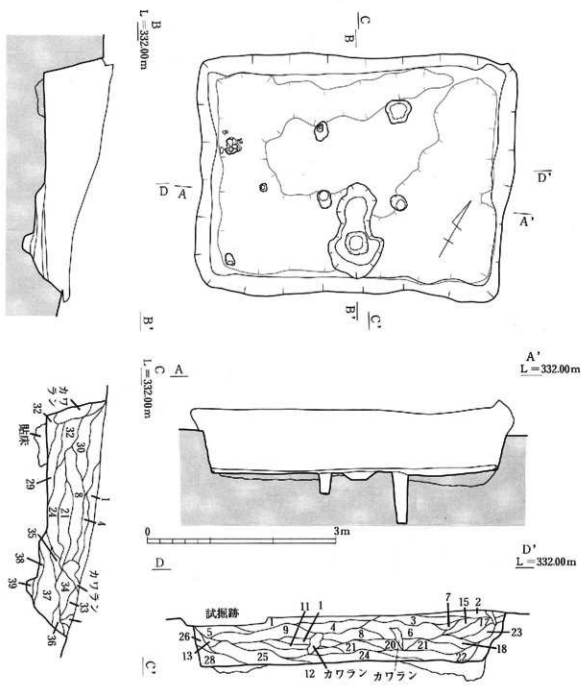
SA2は、上から一段目の中央よりやや西よりの標高約331mの最も高いところに位置する。北壁上部を削平の影響で若干欠くが、長軸5.0m、短軸3.78mの方形プランの住居跡である。V層およびVI層で検出し、傾斜地に作られていることから床面までの深さは、北側で1.06m、南側で0.32m、主軸N-25°-W、面積14.85㎡を測る。

主柱穴は2本で柱穴間の距離は約1.2m。2柱穴間に長軸1.51m、短軸0.88m、深さ約0.1mの土坑が設けられている。土坑内の南側には浅く凹む落ち込みがあり、少量の炭化物が出土したが、焼土は確認できなかった。床面は住居中央部を除いた箇所貼床され、埋土はSA1と同様V層およびVI層の混合土で、約10~30cmの深さに掘られ、一定ではない。

遺物 (第5・6図12~21・23)

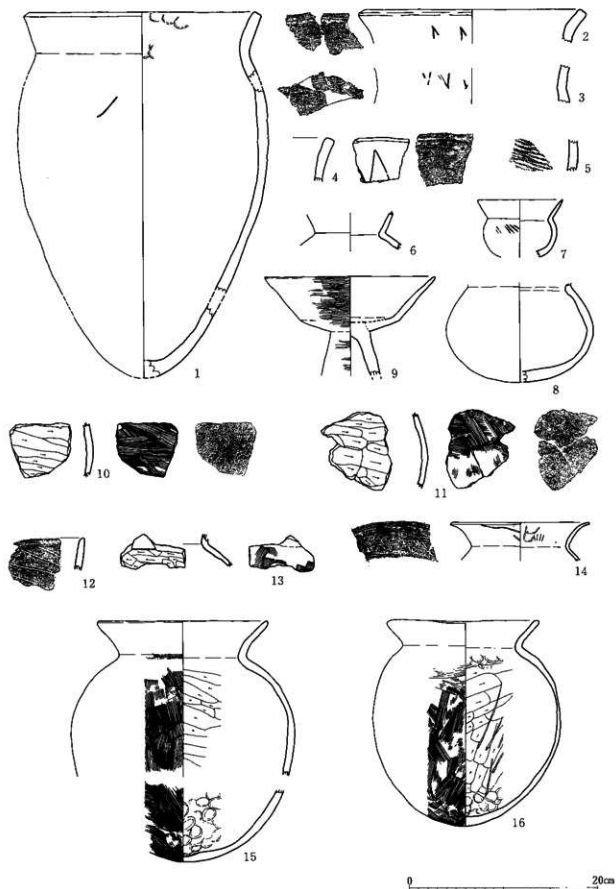
遺物の多くは床面より15~20cmの高さから出土している。ほぼ完形に復元できる16も床面より10cm程度浮いた状況で出土している。

12は壺の口縁部で内面に斜方向に4本+aの沈線(線刻)が施される。13~16は布留系の壺である。15・16の口縁部はやや厚手で端部の調整も丸みをおびる。共通した調整は、口縁部が指オサエの後横ナデ、頸部は外面指オサエ後ナデ、内面は指オサエで1~2cm下からヘラケズリが行われる。13のみ頸部内面屈曲部からヘラケズリされている。胴部外面細かなハケメ調整、内面が横あるいは斜のヘラケズリ、下半部には指オサエがみられる。16の胴部内面には縦方向に近いヘラケズリが施される。色調は明黄褐色系を呈し、胎土はきめ細かく灰白や黒色粒子を含む。外面にはススが、内面胴部下半には炭化物が付着している。14は15・16と比較し薄手で焼成もしっかりして、外面に斜方向の線刻がある。17~23は大型の壺で外面に線刻が施されている。線刻の内容は不明で、単なる線刻なのかあ

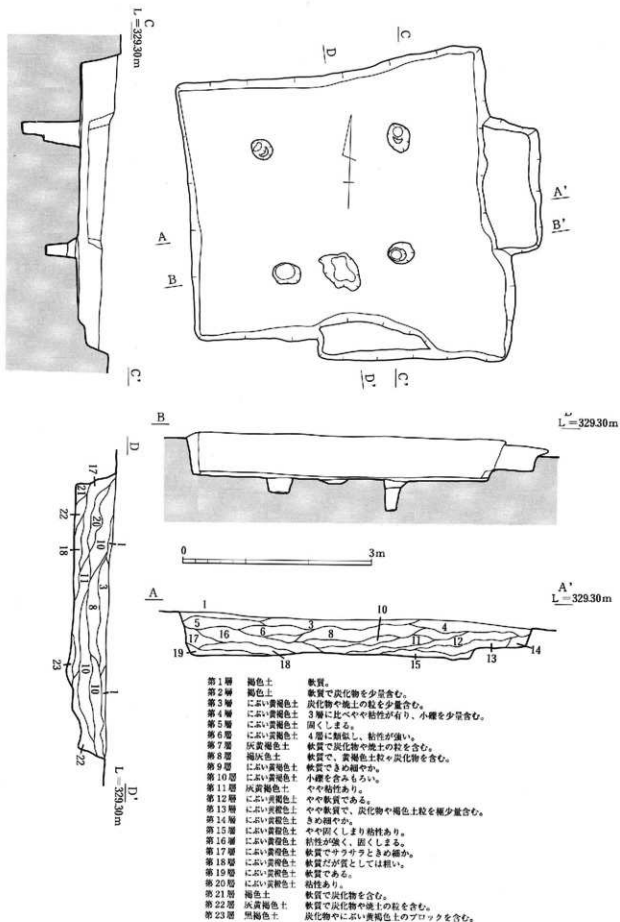


- | | | | | | |
|------|---------|-----------------------------|------|--------|-----------------------|
| 第1層 | にぶい褐色土 | やや軟質で炭化物を少量含む。 | 第18層 | 褐色土 | やや硬質でIV・V層のブロックを含む。 |
| 第2層 | 暗褐色土 | ヤサヤサし、やわらか。 | 第19層 | 暗褐色土 | やや軟質でIV・V層の粒を含む。 |
| 第3層 | 暗褐色土 | 2層よりしまる。炭化物極少量含む。 | 第20層 | 暗褐色土 | やや軟質で炭化物やV層のブロックを含む。 |
| 第4層 | 暗褐色土 | やや硬質でV層のブロックを含む。 | 第21層 | 暗褐色土 | やや硬質で炭化物やV・V層の粒を含む。 |
| 第5層 | オリーブ褐色土 | しまりがあり、炭化物や焼土を少量含む。 | 第22層 | 暗褐色土 | 軟質でV層の粒やブロックを多量に含む。 |
| 第6層 | 暗褐色土 | やや硬質で褐色土粒や炭化物を少量含む。 | 第23層 | 暗褐色土 | 軟質でV層の粒やブロックを多量に含む。 |
| 第7層 | 暗褐色土 | 軟質である。 | 第24層 | 暗褐色土 | 23層に類似し、炭化物を多く含む。 |
| 第8層 | 暗褐色土 | やや軟質で、比較的大きい炭化物やV層ブロックを含む。 | 第25層 | 褐色土 | 硬質でしまる。V・V層ブロックや粒を含む。 |
| 第9層 | 暗褐色土 | 硬質でしまりがある。炭化物や焼土を極少量含む。 | 第26層 | 暗褐色土 | 軟質である。 |
| 第10層 | 暗褐色土 | やや硬質でV層ブロックや炭化物や焼土を少量含む。 | 第27層 | 暗褐色土 | 軟質でV層粒を少量含む。 |
| 第11層 | 暗褐色土 | やや硬質で粘性有り。V層ブロックや炭化物や焼土を含む。 | 第28層 | 暗褐色土 | 硬質で炭化物やV層粒を少量含む。 |
| 第12層 | オリーブ褐色土 | やや硬質で、V層ブロックを含む。 | 第29層 | 暗褐色土 | 硬質で、IV-2層に類似する。 |
| 第13層 | 暗褐色土 | やや軟質で炭化物を少量含む。 | 第30層 | 暗褐色土 | IV・V層ブロックを少量含む。 |
| 第14層 | 暗褐色土 | やや軟質でV層粒を少量含む。 | 第31層 | 黄褐色土 | V層粒を少量含む。 |
| 第15層 | 極暗褐色土 | V層ブロックや炭化物を含む。 | 第32層 | 黄褐色土 | ややしまりがある。 |
| 第16層 | 暗褐色土 | V層粒を含む。 | 第33層 | 暗褐色土 | アカホヤ粒を少量含む。 |
| 第17層 | 暗褐色土 | やや軟質で炭化物微量を含む。 | 第34層 | にぶい褐色土 | アカホヤ粒を少量含む。 |
| | | | 第35層 | 暗褐色土 | 軟質でV層粒を少量含む。 |
| | | | 第36層 | 暗褐色土 | 軟質でV層粒を少量含む。 |
| | | | 第37層 | 暗褐色土 | やや硬質でV層の粒を含む。 |
| | | | 第39層 | 褐色土 | やや硬質で暗褐色土粒を含む。 |

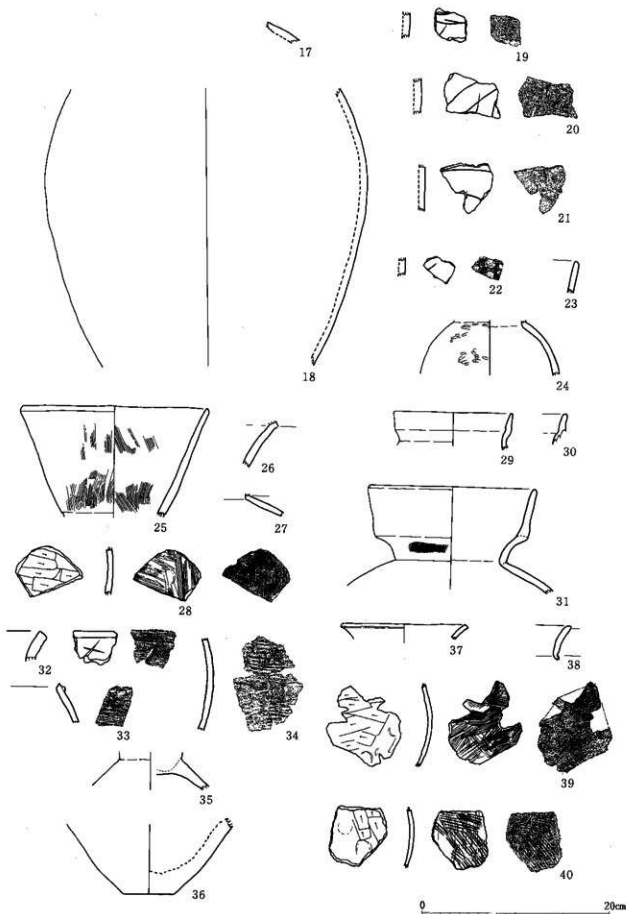
第4図 神殿遺跡C地区SA2遺構実測図



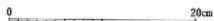
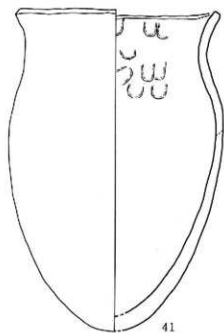
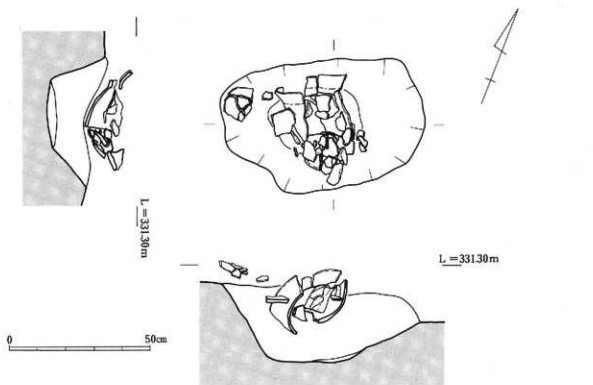
第5图 出土土器实测图(1)



第6図 神殿遺跡C地区SA3遺構実測図



第7图 出土土器实测图(2)



第8図 神殿遺跡C地区SA1遺構実測図及び出土土器実測図

かあるいは19や20にみるような細長い胴体?をもった動物あるいは舟の可能性もある。24は小型の壺で外面はヘラミガキ。石器は15の砥石のみである。緑色岩片で検出時には三つに割れていた。

(第12図)

SA3 (第6図)

SA1の西側約5mに位置する。北SA3周辺は尾根先端部に位置するため、IV層～VI層の堆積が薄く、さらに水田造成の削平を受けているため一部V層の灰白色粘質土が露出している。住居は長軸5.56m、短軸5.0mの方形プランを基調とし、東壁に張り出しを、南壁が鍵状の広がりを持ち、それぞれベッド状遺構を呈している。主軸、N-10°-W、面積は21.11㎡。東壁の張り出しは、幅約2.2m、長さ約0.9m、床面からの高さ約15cm、広さ1.34㎡。南壁は中央部付近から約30cm南側に鍵状に広がり、拡張部分に一部ベッド状遺構(面積0.61㎡)が設けられている。床面までの深さは、傾斜地に作られていることから北側で0.62m、南側で0.28mを測る。主柱穴は4本で、南側の2柱穴間に長軸0.74m、短軸0.48m、深さ約0.08mの不整形の土坑を検出した。土坑内からは少量の炭化物が出土するが、焼土等は確認できなかった。

遺物 (第7図25～26)

住居内出土の遺物は非常に少ない。

25は直口壺の口縁部で、口縁部が長く外方に開く。内外面ともハケメの後横ナデ調整が行われる。26は複合口縁壺の頸部で外面はハケメ調整、内面はナデ。28は布留系壺の胴部片で全体に風化が激しいが、外面は細かなハケメ、外面がヘラケズリ。石器としては磨石(18)が1点出土している(第12図)。そのほか床面から有茎の鉄鏝が1点出土しているが、整理の段階で行方不明となった。

SC1 (第8図)

SA2の東5mに位置し、一部木の根に攪乱されているが、V層上面の遺構検出面で壺が出土したため、周囲を精査して確認した。遺構は長軸0.71m、短軸0.45m、深さ0.31mの不整形をなす。壺は遺構の短軸方向に倒して置かれていたと推定されるが、床面からは10cmほど浮いている。

41は長胴の壺でほぼ完形に復元できた。頸部は稜をもたずなめらかに立ち上がり、口縁部は外方に開く。底部は丸底を呈す。内外面ともいねいなナデ調整だが、胴部下半には粗いケズリ状のナデがみられる。外面胴部上半にはスズが、また内面胴部下半には炭化物が付着している。

遺構外出土の遺物

土師器 (第7図27～40)

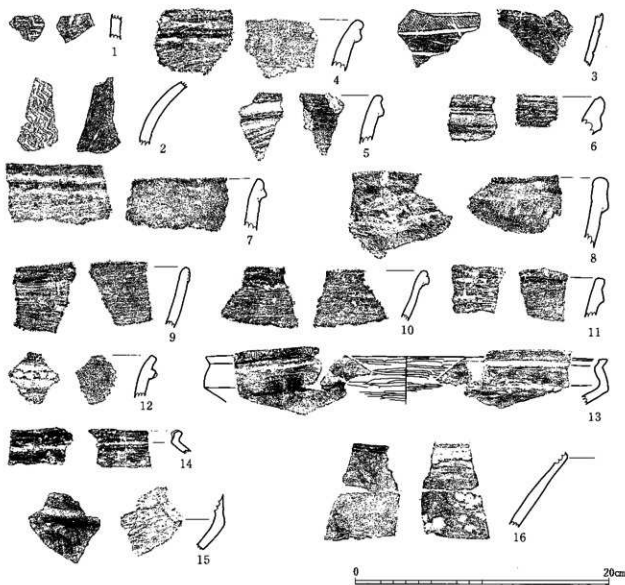
27は壺の頸部、内面の稜は鋭い。内外面ともナデ調整。29～31は口縁部が外傾する複合口縁壺の口縁部である。29・30は口縁部は短く外方に伸びる。内外面とも横ナデ調整。胎土には金(黒)雲母を少量含む。31は29・30に比べ口縁部が長く伸び大型となる。頸部と口縁部との粘土の接合面が観察できる。口縁部は横ナデ、頸部はハケメの後横ナデ。胴部外面は横ナデ、内面は風化気味だがナデと推定される。32は壺の口縁部で外面に「×」状の線刻が描かれる。33は外面にタタキが施された壺の頸部で、頸部屈曲部に突帯が付けられていた可能性がある。34も外面に横方向のタタキをもつ長胴の壺の胴部である。内面はいねいなナデ調整。35は壺の脚台部で、内面は欠損していて厚み調整は不明である。36は壺あるいは壺の底部で平底を呈す。底部付近は粗いナデ調整、内面は風化が著しく

調整は不明。37～40は布留系の甕である。37は口径が13.1cmと小さいが口縁端部はていねいに仕上げられている。39・40は胴部片でタタキ? (粗いハケメの可能性もある) の後ハケメ調整が行われる。縄文土器 (第9図)

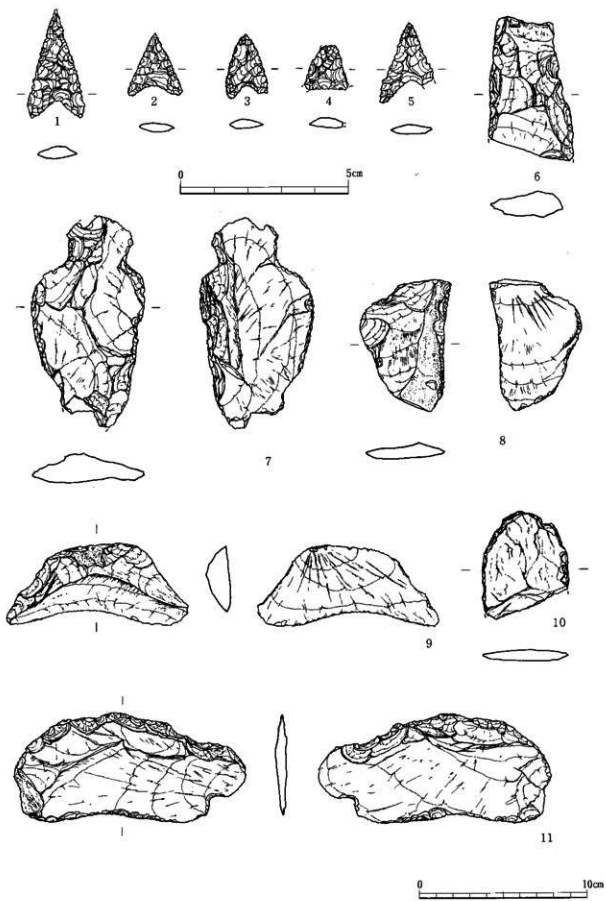
1・2は山形押型土器の胴部片で、大きい山形文が全体に施文される。1は表土、2はSA2埋土中より出土した。3は磨消縄文の胴部片でSA1の埋土中より出土。4～10は口縁部外面に刻目の無い断面三角形の突帯が一条めぐる深鉢形土器の口縁部である。突帯は明確な三角ではなく丸味をもち、突帯の貼り付けは粗雑である。10の突帯は口縁部直下に付けられる。調整は、4・6はナデ調整、それ以外は貝殻条痕文となる。11・12は刻目が施された粗製の深鉢形土器の口縁部である。11は外傾し、不明瞭な刻目が施される。内外面ともナデ調整。12は口縁部直下に刻目突帯がめぐる。刻目は棒状の工具によって施文され、内外面ともナデ調整。13・14は精製磨研の浅鉢で同一個体の可能性もある。内面に段を有し、頸部は短く屈曲する。14は口縁部が波状を呈す。15・16は精製の深鉢の胴部片である。

石器 (第10図)

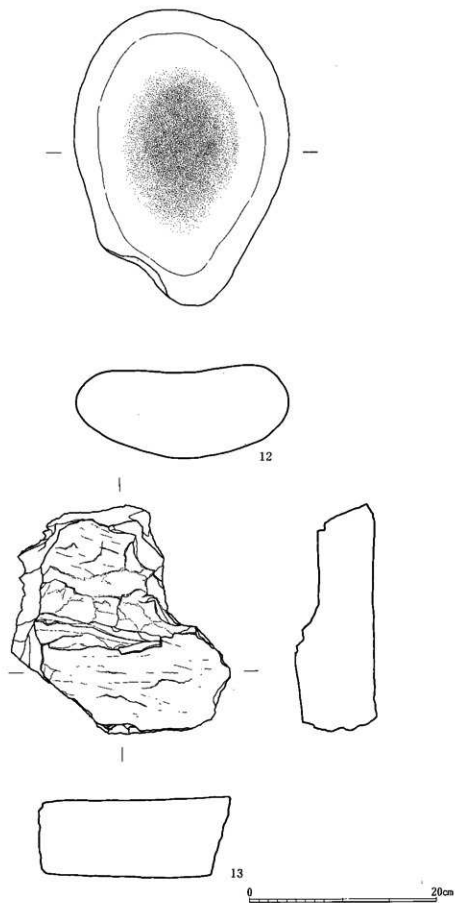
1～5は石鏃ですべて凹基式である。凹基が深いもの(5)やわずかに凹むもの(4)がある。3～5は姫島産黒曜石製。6は打製石斧で刃部は欠損している。10は偏平打製石斧で厚みが無く非常に薄い。7～9・11はスクレーパーあるいは横刃形の石器である。剥片の長軸部分を加工し、直線あるいは内湾気味に刃部を作り出している。7・11は抉りが入りツマミ状を呈す。9は横長の剥片を利用して。12は砂岩製の石皿である。円礫を利用し、片面に凹みが見られる。13は第IV層から出土したチャートの原石で、節理面を全面に残す。石器製作の素材として持込まれたものと考えられる(第11図)。22～23は砥石である。22は全面使用されており、数条の溝が縦方向に走っている。22は小型で現存長約6.8cm、幅約3.2cmを測る。24磨石で全面に磨痕が認められる。



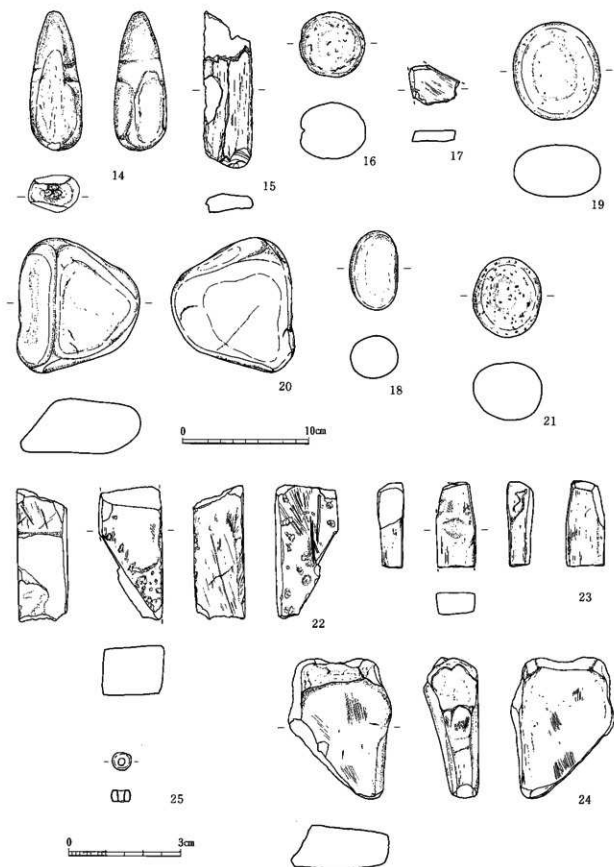
第9圖 出土土器実測圖(3)



第10图 出土石器实测图(1)



第11图 出土石器实测图(2)



第12图 出土石器实测图(3)

第5節 まとめ

今回の調査の出土遺物としては、古墳時代の土師器、鉄鏃、ガラス小玉のほか縄文土器などが出土しているが、ここでは出土土器及び住居跡について若干のべてまとめに替えたい。

遺物の出土量は少ないが甕は、頸部があまりくびれず、底部が丸底をなし、1号土坑出土の41は、1号住居跡の1より頸部の状況や胴部の張りなどからやや時期が下がるものと考えられる。甕は7のような小型丸底塔の系譜のものや丸底をなすもの(8)、長胴で大型のものがある。高坏は1点しか出土していないが、口径が18cm程度と小型で、坏部は浅く、屈曲が明瞭で口縁部が外方に開く。そのほか、外来系要素を有する土器として布留式系甕や二重口縁壺などが出土している。布留式系甕は、C地区全体で少なくとも8個体分の遺物が確認できた。これは県内の同時期の遺跡と比較し極めて多いといえる。口縁部は直線的に開くものや端部がさらに外反するものがあり、口縁端部は丸く仕上げられ胴部は球形をなす。器壁は14や16の胴部中央が一部3mm強と薄くなるものもみられるが、大半は5~8mmと厚手である。外面はタテあるいはナナメ方向の細かなハケ調整、一部その後、ナデ。内面は口縁部横ナデ、頸部指オサエ、胴部ヘラケズリ、胴部下半及び底部は指オサエ。外面にはススが、内面下半部には炭化物が付着している。色調はほとんどが黄褐色系で、灰白色の粒子を含み、砂粒を多く含む在地系の土器とは大きく違っている。外傾する口縁を有する甕(29・30)や大型の二重口縁壺(31)は、同時期と推定される県内の遺跡で散見され、瀬戸内から山陰の影響が想定されるがその系譜や時期についてははっきりせず、今後の検討課題である。

これらの遺物は、出土量が少なく住居床面より浮いて出土しているため住居の時期決定にはならないが、甕・壺の丸底化、小型器種の消失、高坏や布留式系甕の特徴などから、甕の形態差やタタキの有無など地域差はあるものの新富町八幡上遺跡3号住居⁽¹⁾から同上園遺跡F地区のI期⁽²⁾にかけての時期、古墳時代前半(布留新段階)に相当する。

また、今回注目すべき布留式系甕の出土遺跡としては、宮の前第2遺跡B地区2号住居跡(高千穂町)⁽³⁾、枝遺跡(門川町)⁽⁴⁾、猿野遺跡(宮崎市)⁽⁵⁾、熊野原遺跡C地区(宮崎市)⁽⁶⁾、天神河内遺跡(田野町)⁽⁷⁾などがあるが、出土量は少なく、土器組成においても、一部球形胴やタタキ技法、底部の丸底化など外来系要素は認められるものの、あくまで在地系のものが主体を占めている。それらを搬入品とするには、畿内あるいは北部九州の器形や調整、器壁の厚さなど違いが見られ、布留系土器の県内での受容・展開についての今後の課題としておきたい⁽⁸⁾。

次に、検出された住居跡は、すべて方形を基調とした4本柱で、南側に炭化物や焼土を含む浅い土坑を有する。この時期特有の形態を呈し、日常の生活遺構であったと考えられる。ただ、面積は1号住居跡が約38.5㎡、2号住居跡が約15㎡、3号住居跡が約21㎡を測り、さらに住居が一部拡張されたり、ガラス玉を出土するなど住居間に格差が認められる。このように今回調査されたC地区の住居跡群は、古墳時代前半の一時期に営まれた最小単位の集落と想定される。

高千穂地域では、高千穂バイパス関連や広域農道のほか温泉開発などの事業により縄文時代~古墳時代の様相がここ数年間の調査で次第に明らかになっている。調査地も台地の上ばかりではなく、比較的急斜面においても調査の手が入り遺跡の存在が知られるようになった。しかし、生活の基盤である生業については、A地区の古墳時代初頭の住居から磨製石鏃や磨石、磨製石斧、石包丁、鉄鏃など出土し、狩猟・採集や、ヒエアワなどを栽培する畑作や稲作などが行われていたであろう⁽⁹⁾と考えられ、実際、

布留式系壺の内面に炭化物（焦げ）が付着していることから何等かの調理が行われたことが分かるものの、それらに関わるような遺構・遺物については不明な点が多く、発掘調査技術も含め今後の調査の課題であろう。

註

- (1) 近藤協「八幡上遺跡」『新富町文化財調査報告書 第13集』新富町教育委員会 1986
- (2) 谷口武範ほか「上園遺跡F地区・溜水第2遺跡」『新富町文化財調査報告書 第18集』新富町教育委員会 1995
- (3) 長津宗重ほか「吾平原第2遺跡・宮ノ平遺跡・城ノ平遺跡」宮崎県教育委員会 1993
- (4) 平成 年、県教委によって調査。
- (5) 島枝誠「猿野遺跡・萩崎第2遺跡」宮崎市教育委員会 1996
- (6) 面高哲郎ほか「猿野原遺跡C地区」『宮崎学園都市遺跡発掘調査報告書 第2集』宮崎県教育委員会 1985
- (7) 菅付和樹・谷口武範「天神河内第1遺跡」宮崎県教育委員会 1991
- (8) 註3文献においても指摘されている。
- (9)

参考文献

- 小柳和宏「土器の編年（古式土師器を中心に）」『楠野・大分県文化財調査報告書 第63輯』大分県教育委員会 1983
- 寺沢 薫「畿内古式土師器の編年と2・3の問題」『矢部遺跡』奈良県立橿原考古学研究所 1986
- 坂本嘉弘ほか「高松遺跡」大分県教育委員会 1988
- 王永光洋「大溝出土土器群の時期幅について」『安国寺遺跡 大分県・国東町文化財調査報告書 第54集』国東町教育委員会 1989
- 米田敏幸「土師器の編年 近畿」『古墳時代の研究 6』雄山閣 1991
- 吉本正典「宮崎平野出土の土師器に関する編年の考察—須恵器出現以前の資料を中心に」『宮崎考古第14号』宮崎考古会 1995

第1表 神殿遺跡出土土器観察表

遺物 番号	器形 部位	出土 位置	調 整		文様および法量	色 調		胎 上	備 考
			外 面	内 面		外 面	内 面		
1	壺 口縁-底部	SA1	丁寧なナデ	ナデ 指おさえ	(口径23.9cm) (耐高30.1cm) 胴部外面に線刻	にぶい赤褐(5YR5/4) にぶい黄褐(10YR5/4) にぶい黄褐(10YR5/3)	明黄褐(5YR6/6) にぶい黄褐(10YR5/4) にぶい黄褐(10YR5/3)	3~5mmの灰白・茶・褐・黒褐色粒、 2mm以下の透明・茶・褐色砂粒	スス付着
2	壺 口縁	SA1	横ナデ	横ナデ後指おさえ	(口径22.7cm) 外面に線刻	にぶい赤褐(5YR5/3)	にぶい赤褐(5YR5/4)	5mm以下の灰白色粒、 3mm以下の褐・茶褐色砂粒	3と同一個体
3	壺 頸部	SA1	横ナデ	横ナデ後指おさえ	外面に線刻	にぶい赤褐(5YR5/3)	にぶい褐(7.5YR6/3)	5mm以下の灰白・茶・褐色粒	
4	壺 口縁	SA1	横ナデ	横ナデ後指おさえ	外面に扇歯状の線刻	にぶい褐(7.5YR6/3)	にぶい褐(5YR6/4)	5mm以下の暗褐色粒、4mm以下の褐色、3mm以下の灰・茶褐色、2mm以下の黒褐色粒	スス付着
5	壺 胴部	SA1	右下りのタタキ	ナデ		にぶい黄褐(10YR5/3)	暗灰青(2.5Y4/2)	1mm以下の透明・黒色光沢粒	
6	壺 頸部	SA1	口縁部横ナデ 胴部ヘラミガキ	横ナデ 指おさえ		にぶい橙(7.5YR7/4)	にぶい黄橙(10YR7/4)	2mm以下の黄橙・褐色砂粒、 1mm以下の透明・黒色光沢粒	スス付着
7	壺 口縁-底部	SA1	工具による調整の 後丁寧な横ナデ	丁寧なナデ	(口径8.9cm)	黄褐(2.5Y5/3) にぶい褐(7.5YR5/4)	灰黄褐(10YR4/2) にぶい褐(7.5YR5/4)	2mm以下の灰白色粒、 0.5mm以下の透明・黒色光沢粒	黒底
8	壺 頸部-底部	SA1	ナデ 風化著しい	ナデ		にぶい黄橙(10YR6/4)	にぶい黄橙(10YR7/3)	3mm以下の灰・褐・赤褐・黒色砂粒、 微細な透明光沢粒	スス付着
9	高坏 坏部-胴部	SA1	ヘラミガキ 胴部の後ヘラミガキ	坏部ヘラミガキ 胴部ナデ	(口径18.1cm)	にぶい褐(5YR6/4)	にぶい褐(5YR6/4)	1.5mm以下の黄・褐・黒褐色砂粒、 0.5mm以下の透明光沢粒	
10	壺 胴部	SA1	ハケメ	ヘラケズリ		にぶい橙(10YR7/4)	にぶい橙(10YR6/4)	2mm以下の灰白・黄褐色、 1mm以下の褐色、 黒色砂粒、透明光沢粒、 微細な黒色光沢粒	布留系 スス付着
11	壺 頸部	SA1	ハケメ	ヘラケズリ		にぶい黄橙(10YR6/3)	にぶい黄橙(10YR6/3)	2.5mm以下の灰白・黄・褐色、 1mm以下の褐色、 透明光沢粒、 微細な黒色光沢粒	布留系 スス付着
12	壺 口縁	SA2	ナデ	ナデ	内面に数条の線刻	黒褐(10YR3/2)	にぶい黄橙(10YR6/3)	3mm以下の乳白色粒、 2mm以下の透明・黒色光沢粒	スス付着
13	壺 頸部	SA2	ナデ ハケメ	ナデ ヘラケズリ		にぶい黄橙(10YR6/4)	にぶい黄橙(10YR6/4)	2mm以下の黄橙・灰褐色 砂粒、黒色光沢粒	布留系 スス付着
14	壺 口縁-頸部	SA2	横ナデ	横ナデの後指おさえ	(口径14.4cm) 外面に線刻 内面に3本の線刻	にぶい褐(7.5YR6/3)	にぶい橙(7.5YR6/4)	3mm以下の灰白・褐色砂粒、 1.5mm以下の透明・黒色光沢粒	布留系
15	壺 口縁-底部	SA2	口縁部横ナデ 胴部ハケメ	頸部指おさえ 胴部ヘラケズリ 胴部指おさえ	(口径17.7cm) 鉛黄	橙(7.5YR6/6) 明黄褐(10YR6/4)	明黄褐(10YR6/6) 褐灰(10YR4/1)	5mm以下の灰白・褐・黒色粒、 2mm以下の黒色光沢粒	布留系 スス付着
16	壺 完形	SA2	口縁部横ナデ 胴部ハケメ	口縁部指おさえ の横ナデ	口径(15.6cm) 器高22cm	浅黄(2.5Y7/4)	浅黄(2.5Y7/4)	4mm以下の白・灰白色砂粒	布留系
17	壺 頸部	SA2	ヘラミガキ	風化著しい		にぶい橙(7.5YR6/4)	灰白(2.5Y7/1)	3mm以下の黄・灰・褐色砂粒	II-2同一個体
18	壺 頸部	SA2	ヘラミガキ	風化著しい		橙(7.5YR6/6) にぶい橙(7.5YR6/4)	橙(7.5YR7/6) にぶい黄橙(10YR7/4)	5mm以下の乳白・黄・灰・ 褐色砂粒	
19	壺 胴部	SA2	ヘラミガキ	風化著しい	外面に線刻	にぶい橙(7.5YR6/4)		3mm以下の黄・灰・褐色砂粒	
20	壺 胴部	SA2	ヘラミガキ	風化著しい	外面に線刻	にぶい橙(7.5YR6/4)		5mm以下の黄・灰・褐色砂粒	
21	壺 胴部	SA2	ヘラミガキ	風化著しい	外面に線刻	にぶい橙(7.5YR6/4)		3mm以下の黄・灰・褐色砂粒	
22	壺 胴部	SA1	ヘラミガキ	風化著しい	外面に線刻	にぶい橙(7.5YR6/4)		4mm以下の黄・灰・褐色砂粒	
23	壺 口縁	SA2	横ナデ	横ナデ		灰黄褐(10YR4/2)	にぶい黄橙(10YR6/4)	4mm以下の乳白色粒、 1mm以下の透明・黒色光沢粒	スス付着
24	壺 頸部-底部	SA2	ヘラミガキ	指おさえの後ナデ		橙(7.5YR7/6) にぶい黄橙(10YR5/3)	橙(7.5YR6/6)	4mm以下の灰白・灰・黄・褐色、 1mm以下の黒褐色砂粒	スス付着
25	壺 口縁-頸部	SA3	ハケメの後横ナデ	ハケメの後ナデ	(口径14.8cm)	にぶい黄橙(10YR6/4)	にぶい黄橙(10YR6/4) にぶい橙(7.5YR6/4)	3mm以下の白・褐色砂粒、 0.5mm以下の透明光沢粒	スス付着
26	蓋合口縁蓋 口縁	SA3	ハケメ	ナデ		橙(7.5YR7/6)	橙(7.5YR7/6)	3mm以下の黄白・黄・赤褐・ 褐色砂粒、0.5mm以下の透明光沢粒	
27	壺 頸部	b-IV	ナデ	ナデ		浅黄橙(10YR8/4)	褐灰(10YR6/1) 黄橙(10YR6/6)	2mm以下の乳白・褐色砂 粒透明光沢粒	
28	壺 胴部	SA3	ハケメ	ケズリ		浅黄橙(10YR8/4) にぶい黄橙(10YR5/3)	浅黄橙(10YR8/3) にぶい黄橙(10YR6/3)	3mm以下の灰白・黄白・黄褐色砂粒、 1mm以下の透明・黒色光沢粒	布留系 スス付着
29	壺 口縁	b-III	丁寧な横ナデ	指おさえの後ナデ	(口径12.5cm)	にぶい黄橙(10YR7/4)	にぶい黄橙(10YR6/4)	1mm以下の乳白・灰・黄・褐色砂粒、 微細な透明・黒色光沢粒	スス付着
30	壺 口縁	c-IV	横ナデ	横ナデ		黒褐(2.5Y3/2)	にぶい黄橙(10YR6/4)	1mm以下の灰白色砂粒、透明・ 黒色光沢粒	スス付着

第2表 神殿遺跡出土土器観察表

遺物 番号	器形 部位	出土 位置	調 整		文様および法量	色 調		胎 土	備 考
			外 面	内 面		外 面	内 面		
31	竈 口縁-胴部	d-II層	口縁部横ナテ 器底ナテの後ハナメ	横ナテ 指おさえ	(口径17.6cm)	浅黄 (25Y7/4)	浅黄 (25Y7/4)	3cm以下の白色砂粒、 2cm以下の透明・黒色光沢粒	黒変
32	竈 口 縁	d-II層	横ナテ	指おさえ後横ナテ	「メ」印の沈線	赤褐 (5YR4/6)	赤褐 (5YR4/6)	4cm以下の赤褐色粒、 2cm以下の褐色砂粒	
33	竈 胴部	b-II層	タタキ	ナテ	胴部に突帯	にぶい黄褐 (10YR5/4)	灰黄褐 (10YR4/2)	2cm以下の白色砂粒、透明 黒色光沢粒	
34	竈 胴部	b-II層	タタキの後一帯ナテ	ナテ		黄褐 (25Y5/4) 黒褐 (25Y3/1)	黄褐 (25Y5/4) 黒褐 (25Y3/1)	3cm以下の褐色砂粒、 1.5cm以下の透明・黒色光沢粒	黒変
35	竈 底部脚台	b-IV層	ナテ 風化ざみ	ナテ 風化ざみ		にぶい黄褐 (10YR5/3)	にぶい褐 (7.5YR5/4)	4cm以下の乳白・白色砂粒、 3cm以下の透明・黒色光沢粒	
36	竈 底部脚台	d-IV層	丁寧なナテ	ナテ 風化著しい	(底径4.0cm)	にぶい黄褐 (10YR6/4)	橙 (5YR6/6)	3cm以下の白色砂粒、1.5cm以 下の乳白・赤褐・黒色砂粒	
37	竈 口 縁	b,d-IV層	横ナテ	横ナテ	(口径13.1cm)	暗灰黄 (2.5Y5/2) にぶい黄褐 (10YR5/3)	明赤褐 (5YR5/6) にぶい黄 (10YR5/4)	2cm以下の灰白・黄橙・赤褐 色砂粒、透明・黒色光沢粒	布留系
38	竈 口縁-胴部	b-IV層	横ナテ	指おさえの後ナテ 指おさえ		にぶい黄 (7.5Y6/4) 黄灰 (2.5Y4/1)	にぶい黄 (7.5Y6/4)	1cm以下の灰褐・赤褐・赤色 砂粒、透明・黒色光沢粒	布留系 スス付着
39	竈 胴部	b-II層	タタキ?	ヘラズリー一帯ナテ		灰黄褐 (10YR4/2)	黒褐 (7.5YR2/2)	1cm以下の灰黄色砂粒、透明 黒色光沢粒	布留系 スス付着
40	竈 胴部	b-II層	タタキの後ハナメ	ヘラズリー一帯ナテ		灰黄褐 (10YR5/2)	にぶい黄 (2.5Y6/3)	1cm以下の灰白・灰白・褐色砂 粒、柱状の黒色光沢粒	布留系 内外黒スス付着
41	竈 口は丸形	S C 2	ナテ	指おさえの後ナテ		にぶい黄褐 (10YR5/4)	にぶい赤褐 (5YR5/4)	5cm以下の乳白・灰白・褐色砂粒、2cm以 下の黒色光沢粒、1.5cm以下の透明光沢粒	

第3表 神殿遺跡縄文土器観察表

遺物 番号	器形 部位	出土 位置	調 整		文様および法量	色 調		胎 土	備 考
			外 面	内 面		外 面	内 面		
1	深 鉢 部	b-II層	ナテ	ナテ	外面に山形押型文	にぶい黄 (2.5Y6/3)	にぶい黄 (2.5Y6/3)	微細な透明光沢粒	
2	深 鉢 部	SA 2	ナテ	ナテ	外面に山形押型文	灰黄 (2.5Y6/2)	にぶい黄橙 (10YR6/4)	1cm以下の透明光沢粒	
3	深 鉢 部	SA 1 埋土中	ナテ	ミガキ	外面に磨消縄文	明黄褐 (10YR6/6)	にぶい黄橙 (10YR7/4)	6cmの黒色粒、3cm以下の灰白・ 褐色砂粒、微細な透明光沢粒	
4	深 鉢 部	b-IV層	ナテ	指押えの後ナテ	外面に突帯	にぶい黄褐 (10YR5/3)	にぶい黄橙 (10YR6/4)	4cm以下の淡黄・灰色砂粒、 2cm以下の透明・黒色光沢粒	
5	深 鉢 部	b-II層	貝殻条痕	横ナテ	外面に突帯	にぶい黄橙 (10YR6/3)	にぶい黄橙 (10YR6/4)	7cm以下の淡黄・3cm以下の 淡黄・灰色砂粒、黒色光沢粒	
6	深 鉢 部	b-IV層	横ナテ	横ナテ	外面に突帯	灰黄褐 (10YR4/2)	にぶい黄橙 (10YR6/4)	1cm以下の乳白色砂粒、 透明・黒色光沢粒	スス付着
7	深 鉢 部	b-III層	貝殻条痕	指押えの後ナテ	外面に突帯	にぶい黄橙 (10YR6/4) にぶい黄褐 (10YR6/3)	にぶい黄橙 (10YR6/6) にぶい黄 (10YR5/3)	5~8cmの褐色粒、2cm以下の淡黄・ 褐色砂粒、1cm以下の黒色光沢粒	
8	深 鉢 部	b-II層	丁寧なナテ	丁寧なナテ	外面に突帯	灰黄褐 (10YR4/2) 暗灰 (N3)	にぶい黄 (7.5YR5/4) 暗灰 (N3)	3cmの灰色粒、3cm以下の淡黄・ 灰・褐色砂粒、透明・黒色光沢粒	
9	深 鉢 部	b-IV層	貝殻条痕	貝殻条痕	口縁部直下におろかな突帯	にぶい黄褐 (10YR4/3)	にぶい黄褐 (10YR5/4)	3cm以下の白色砂粒、透明 黒色光沢粒	
10	深 鉢 部	b-IV層	貝殻条痕	貝殻条痕	外面に突帯	にぶい黄 (2.5Y6/4) にぶい黄橙 (10YR6/4)	にぶい黄橙 (10YR6/4)	3cm以下の淡黄・灰色砂粒、 透明・黒色光沢粒	
11	深 鉢 部	SA 1	貝殻条痕	ナテ	外面に刻目突帯	オリーブ黄 (7.5Y3/2)	オリーブ黄 (2.5Y4/6)	3cm以下の灰白色砂粒・ 透明光沢粒	
12	深 鉢 部	b-IV層	ナテ	ナテ	外面に刻目突帯	にぶい黄褐 (10YR4/3)	にぶい黄橙 (10YR5/3)	3cm以下の淡黄・褐色砂粒、 透明・黒色光沢粒	
13	浅 鉢 部	IV層 b-IV層	ミガキ	ミガキ	内面に段を有す	暗褐 (10YR3/3)	黒褐 (10YR3/2)	微細な淡黄色砂粒	精製磨研
14	浅 鉢 部	SA 1 b-II層	ミガキ	ミガキ	口縁部鼓状 内面に段を有す	黒 (5Y2/1)	オリーブ黄 (5Y3/2)	微細な透明光沢粒	精製磨研
15	深 鉢 部	a-IV層	ミガキ 丁寧なナテ	ミガキ		にぶい黄 (2.5Y6/3)	にぶい黄 (2.5Y6/3)	1cm以下の褐砂粒、透明・ 黒色光沢粒	スス付着 精製磨研
16	深 鉢 部	SA 3	ミガキ 風化著しい	ミガキ		黒褐 (10YR3/1)	黒褐 (10YR3/1)	0.5cm以下の黄白・褐色砂 粒、透明光沢粒	精製磨研

第4表 神殿遺跡出土石器計測表

発掘 番号	器 種	出土位置	石 材	現存長 (cm)	現存幅 (cm)	現存厚 (cm)	重 量 (g)	備 考
1	石 鍬	b-IV層	チャート	3.20	1.70	0.36	1.5	
2	石 鍬	1号住居埋土	チャート	1.83	1.59	0.26	0.5	
3	石 鍬	a-V層	黒曜石	1.95	1.2	0.27	0.5	姫島産
4	石 鍬	d-III層	黒曜石	1.30	1.30	0.31	0.6	姫島産 先端部および脚欠損
5	石 鍬	c d段IV-2層一括	黒曜石	2.40	1.60	0.32	0.7	基部欠損・姫島産
6	打製石斧	a-III層	流紋岩	8.60	5.05	1.55	7.4	刃部欠損
7	横刃形石器	表土中	流紋岩	12.55	6.70	1.75	120.0	つまみあり
8	スクレイパー	c-IV層	流紋岩	7.80	5.45	0.95	38.0	
9	スクレイパー	c-IV層	流紋岩	4.85	10.75	1.40	53.7	
10	偏平打製石斧	b-IV層	粘板岩	6.45	5.20	0.65	29.4	刃部欠損
11	横刃形石器	b-IV層	流紋岩	6.50	13.80	0.70	81.2	
12	石 皿	a-IV層	砂岩	31.60	22.75	9.90	11,500	
13	チャート原石	d-IV層	チャート	24.55	23.20	8.7	7,000	
14	敷 石	1号住居埋土	砂岩	11.10	4.10	3.0	183.2	
15	砥 石	2号住居埋土	緑色片岩	12.45	3.95	1.60	89.7	欠損
16	磨 石	1号住居埋土	花崗岩	5.15	5.25	4.50	157.5	
17	砥 石	1号住居埋土	流紋岩	3.20	4.30	0.80	4.6	欠損
18	磨 石	3号住居埋土	輝石安山岩	6.25	3.85	3.40	124.7	
19	磨 石	b-II層	閃緑岩	7.80	6.90	4.10	345.5	
20	砥 石	d-III層	砂岩	10.70	9.75	4.40	675.3	
21	磨 石	a-IV層	凝灰岩	6.30	5.50	4.6	219.4	
22	砥 石	c-III層	砂岩	10.60	5.0	3.95	299.5	欠損
23	砥 石	d-III層	砂岩	6.75	3.15	1.75	72.8	欠損
24	砥 石	a-IV層	砂岩	11.20	8.25	3.50	466.8	欠損
25	小 玉	1号住居埋土	緑色ガラス	0.5	0.5	0.3	0.1	



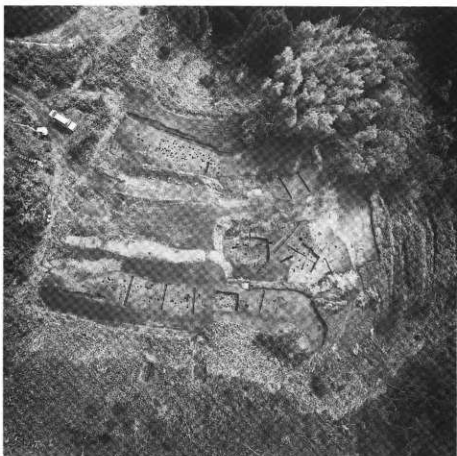
調査区遠景
(北西より)



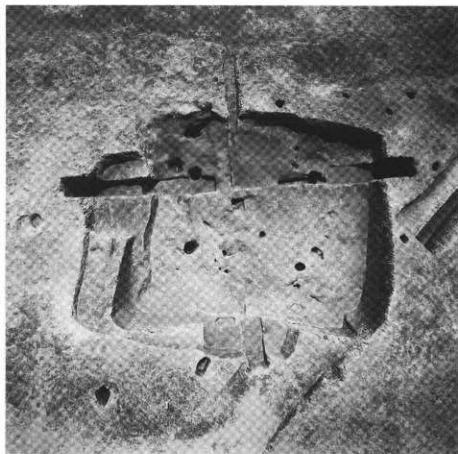
調査区遠景
(北より)



調査区遠景
(西より)



遺構検出状況



SA1
検出状況

SA1 検出状況 (南より)

